明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正六年十一月十五日發行（毎月一回十五日發行）

第廿一年 統一 十二月號

（第二百七十三號）

法華經壽量品の大要（其三）

基督教の神と　聖上陛下と何れか尊きやとの基督信徒の質問に對して……松尾皷城
機微譚　語（其四三、徹功累德　其四四、無駄は禁物）……山根青村
生命及其の起原に對する史的考察……武田顯龍
課題和歌「舟時雨」發表　子爵　清岡長言選
千葉縣下聯合大法會概況。播備聯合布教會
玄妙會郊外會……一記者

日蓮聖人教義綱要……井村日咸
物質精神平均の充實生活……遞信技師　小關三平

大僧正　本多日生

發行事務取扱所　東京小石川白山前町　統一編輯所
◀振替口座東京三三五三三番▶

（第二十一年十月卷）　「統一」　（第二百七十二號）

誌本改正定價並に廣告代價

○一冊十錢。郵送分は別に五厘申受候
○前金送金分に限り郵送料申受ず候
○代金未濟の方へは六ヶ月目乃至一ヶ年目毎に御便利上集金郵便差上ます（但此場合郵便局手數料五錢加算仕るべく候）
○故に郵便送り當方より集金のものは半ヶ年六拾八錢、一ヶ年壹圓卅一錢申受候但し一ヶ年讀者の方より前金御送金は壹圓廿錢にて宜しく候
●送金は振替貯金口座東京三三五三三番統一編輯所に御拂込を乞ふ（もよりの郵便局にて御拂込み下され度、確實に御座候小爲替は紛失のおそれが有ます
●領收證は特に御請求以外は本誌上に表として取纒め掲載します
●廣告料は一頁特別十五圓。半頁八圓五拾錢。三分一頁六圓。
▲五號活字十八字詰一行二拾五錢
●交換及び義務廣告はお斷り申候

▲御注意

●多數中の事に付若し雜誌不配達の節は御一報を乞ふ、當方より早速御送本可仕候
●集金郵便差上候節、多數の事に付計算相違、又は二重御請求等の手違ひ候節は御面倒ながら御一報下され度願上候
●郵便左樣上候節は其方の都合にて御拒絕の方も有之御儲放任なく葉書にて一寸其旨御一報下され度早速送本申上候。又御拒絕の節は不用の本は送返御引換御送本申上候。又御取消、併せて一寸御一報下され度早速送本申上候。
●多數の事に付御返事は往復はがきの以外は御返事仕らぬ場合有之候
●踏君最大の熱心可御盡力に依り我統一が宗教雜誌界中に於て發行中に數へらるゝに至りしことを感謝し申候

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正六年十月十五日發行（毎月一回十五日發行）
統一事務取扱　東京市小石川區白山前町　統一編輯所

▲本誌事務取扱所東京市小石川區白山前町統一編輯所發行所東京市淺草區北清島町十四番地編輯兼發行人松尾英四郎△印刷人鈴木日雄（▲本誌定價一冊十錢郵稅五厘▼）

●日蓮各宗――寺院――御僧●
法衣――草木――直に御聯想下され候儀に候
京都　草木本店　電話中七三五番　振替口座東一一五五九番
三條通烏丸東入ル町
東京淺草區三好町二番地　草木支店　電話下谷三四三四番　振替口座東二四五六八番

●何も神佛具を調製する敬虔心を以て奉事仕候●
佛像佛具　調度所
位牌木鉦
宮殿憧天蓋其他一式
▲普通品定價郵券貳錢封入送呈
總本山身延山
總本山妙滿寺
大本山本國寺
日宗各教團
御用達
京都寺町四條南大雲院前
舊名『乾清』事　佛師　辻井岩次郎
振替大阪八一五七番　電話下三二五八番
大多少に限らず御用奉願上候也
●御用仰せ被下候はゝ叮嚀深切を旨と致候●

△謹告▽
抑も當藥王寺に於て師弟相續して數百年秘傳の眼藥血の藥は寔に「是好良藥今留在此」の經文の如く其効驗著しき爲め或は布田目藥血の藥と稱して發賣するも此等は皆僞物にして上總山武郡布田藥王寺前住職中田日達の調製法を繼紹せる現住職齋藤日章の名義外は拙寺の製藥に無之候間此段謹告候也「千葉縣山武郡源村上布田藥王寺住職齋藤日章の名有るは眞物なり」

●眼の藥
定價壹瓶（試用五錢●外拾錢、貳拾錢、五拾錢）
▲効能▼たゞれ目、かすみ目、ほし目、くも目、ち目、うち目、つかれ目、はやり目、トラホーム等に効能あり

●血の藥　定價（金五錢　金拾錢）
▲効能▼男女ちの道產前產後▲めまい▲たちくらみ▲時候あたり▲氣絕▲のみすぎ▲酒毒▲食あたり▲風邪▲婦人病▲貧血疾▲頭痛等

眼藥血の藥　製藥本舗
千葉縣山武郡源村上布田
藥王寺住職　齋藤日章
振替口座東京第六七九一番

（東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍印行）

雜誌改正定價並に廣告代價

○一冊十錢。郵送分は別に五厘申受候
○前金送金分に限り郵送料申受ず候
○代金未濟の方へは六ヶ月目乃至一ヶ年目毎に御便利上集金郵便差上ます（但此場合郵便局手數料五錢加算仕るべく候）
○故に郵便送り當方より集金のものは半ヶ年六拾八錢、一ヶ年壹圓卅一錢申受候但し一ヶ年讀者の方より前金御送金は壹圓廿錢にて宜しく候

●送金は振替貯金口座東京三三五三三番統一編輯所に御拂込を乞ふ（もよりの郵便局にて御拂込み下され度、確實に御座候小爲替は紛失のおそれが有ます

●領收證は特に御請求以外は本誌上に表として取纒め掲載します

●廣告料は一頁特別十五圓。半頁八圓五拾錢。三分一頁六圓。

▲五號活字十八字詰一行二拾五錢

●交換及び義務廣告はお斷り申候

▲御注意

●多數中の事に付若し雜誌不配達の節は御一報か乞ふ、早速御送本可仕候

●當方より集金郵便上候節、多數の事に付計算相違、又は二重御請求等の手違ひ候節は御面倒ながら御一報下され度順上候

●集金郵便差上候節、何かの御都合にて御拒絶の方も有之候へば、引續き御送本申上候。又御旨御一報下され度早速處報左樣の節は其儘御放棄仕なく葉書にて一寸其御一報下され度早速處報

●取拒絶の節も一寸御一報下され度早速處報

●多數の事に付御返事仕るべく候

●御返事は往復はがきの以外は御返事仕ら申止ぬ場合有之候

●諸君の熱心可成御盡力の發行中に數へらるゝに至りしことを感謝し最大の多數の中候

●日蓮各宗——寺院——御僧——

法衣——草木——直に御聯想下され候儀に候

京都 三條通烏丸東入ル町

草木本店

電話中七三五番 振替口座東一一五五九番

東京淺草區三好町二番地

草木支店

電話下谷三四三四番 振替口座東二四五六八番

●有も神佛具を調製する敬虔心を以て奉事仕候

佛像佛具 調度所

位牌木鉦

宮殿憧天蓋其他一式

▲普通品定價郵券弐錢封入送呈

御用達

總本山身延山
總本山妙滿寺
大本山本國寺
日宗各教團

舊名『乾清』事 京都寺町四條南大雲院前 大佛師

辻井岩次郎

振替大阪八一五七番 電話下三二五八番

多少に限らず御用奉願上候也

●御用仰せ被下候はゞ叮嚀深切を旨と致候

〈謹告〉

抑も當藥王寺に於て師弟相續して數百年秘傳の眼藥血の藥は寔に「是好良藥今留在此」の經文の如く其効驗著しき爲め或は布田目藥血の藥と稱して發賣するも此等は皆僞物にして上總山武郡布田藥王寺前住職中田日達の調製法を繼紹せる現住職齋藤日章の名義外は拙寺の製藥に無之候間此段謹告候也「千葉縣山武郡源村上布田藥王寺住職齋藤日章の名有るは眞物なり」

●眼の藥

定價壹瓶（試用五錢●外拾錢、貳拾錢、五拾錢）

▲効能▼ たゞれ目、かすみ目、ほし目、くも目、ち目、うち目、つかれ目、はやり目、トラホーム等に効能あり

●血の藥 定價（金五錢 金拾錢）

▲効能▼ 男女ちの道產前產後▲めまい▲たちくらみ▲時候あたり▲氣絕▲のみすぎ▲酒毒▲食あたり▲風邪▲婦人病▲貧血疾▲距痛等

眼藥 血の藥 **製藥本舗**

千葉縣山武郡源村上布田

藥王寺住職 **齋藤日章**

振替口座東京第六七九一番

「統一」 第廿一年十一月卷（二百七十三號）

基督教の神と 聖上陛下と何れか尊

きやとの基教信徒の質問に對して

先般盛岡方面の佛教信者にして併せて國體擁護論者たる某氏から『一日基督教の信徒の散髮屋の主人某と佛耶二教の優劣論より花が咲き遂に國體論にまで及び、彼の主人曰く世界を創造したる基督教の神と日本の天皇陛下と其尊さ何れぞや』との質問に會す、冀くば統一誌に說明せよとの事に付、私の考へをお答へ致します。

基督教の神は世界を新に創造したりといふも、世界は無より有に作り得べきものでないから此の創世はアテにならぬ。我が神代の記に依れば天地の初發を說いて大神聖の常立（久遠壽）を說いて居り、二神の修理固成を說いて居る。之を法華經に照せば無始無終の久遠本佛の實在に伴ふ國土の本來本有の義は彼に合せずして我に符合する。之を哲理に考へても萬物の本源に有始すべからずして、只一時の變化を有始とせば神の創造も假作であつて根本的に創始したものでないことが明になるであらう。然れば彼のゴットを引張り出しても其のゴットの創造說は有名無實のもので併せて元來ゴットそのものを否認するから、彼の徒が世界を作つた基督教の神と　日本天皇陛下

と何れが尊きやの如き比較論はテンで問題にならぬのである。

法華經に現れたる佛陀身と國土論とは、我日本の古代記の神と國土論と同規にして、從つて法華經上に立つ日蓮主義者が我日本に對つて讃聲を放ち、法國冥合の義も生じて來るのである。日蓮主義者の法國冥合論は俗に迎合するのでなく我國體と主義と同規の根柢を有するからであつて、隨つて單に　陛下を國首として尊敬する以上に法義的に尊敬するのである。

畏くも我國の　聖上陛下の御位は私造の人階にあらずして天壤の高御位でゐます、即ち天地初發の神聖修理固成の神より一系して繼續ましますの尊位である、然らば取も直さず神聖の御位にます上の人間神にましませば、彼の有名無實の基督教の神と優劣を論ずるは、夢に見た牡丹餅の味を信じて實在の萩餅の味を否定するやうなものである。

由來法華經の力は、我國體を根本的に了解しつゝ益々之を讃仰して豪も主義を瑕つけず、否法國相抱擁して、國の上よりせば世界萬國を日本的精神化せしめ、法よりせば人類の總てを一佛法に歸信せしむる上に、少しの障礙のないところにあるのである。

基督教が我美しき國體とも背反するの止むなき次第は其教理の根柢のお粗末なのに依る、即ち神の本體が怪しいのに基つて居るのである。

某氏よ、日本魂を發揮して、日蓮魂を發揮して、其の散髪屋の主人を說破し、以て法國の爲に一分の盡力を致されよ、斷じて弱ること勿れである。

法華經壽量品の大要

本多日生講演

（一〇）日蓮主義勃興の好機運

今までのやうに一人か二人が改宗するとかせんとか云ふ手ぬるい事ではない一國の風教、一國の人心嚮導の目的に於て、宗教の必要を自覺し、健全なる宗教を何れに定むるかと云ふ選擇に方つて、將に日蓮主義に札が落ちんとして、どうしても日蓮聖人の立正安國の赤誠を認めなければならぬと云ふ時に達して現在せる末流の僧侶、俗人の信仰が低い爲に、間違つた事が多い爲に此の千載一遇の好機を逸するに至つては、左樣な不心得の者は死して日蓮聖人に何の顏あつて見ゆることが出來ませうか、（拍手大喝采）今日は冗談ではない、物は考へなければならぬ、機運と云ふものは一度逸しては復來ないのである。一旦起つて來た正しき教を求むる國民の要求が一度去つて、日蓮主義は善いやうであつたけれども段々調べて見れば坊主の根性が腐つて居る、其の中には僞の分子が多い、信者は頑迷にして語るに足らぬと、事實斯うであつて見れば、何處か教の中にも、日蓮聖人の氣風にもそんなものがあつたのでありはせぬか、敎にさう云ふ事があつて、表面見れば立派のやうだけれども、潛んだる流れがあつて今日の如き腐敗したる僧俗を造つたのではないか、果して然りとすれば日蓮主義を採用することは、少なくとも躊躇しなければならぬ、再考しなければならぬと云ふことになつて、其の中に他の宗教が一度民心を襲ふたならば、間違つて居つても宗教心が一度這入つたならば、之を除き去ることは出來ないであらう、諸君、遺れば今日である。（拍手）ダラ〳〵と幾ら末法萬年の末までと云つても、何時までもグズ〳〵して居るべき時ではない。今まで屆して居つた日蓮主義が今日活動を起したのは、決して早い事ではない。日蓮聖人去つて既に六百數十年、モウ早や六百五十年遠忌が十數年の後に迫つて居る或る地方では來年あたりから日蓮聖人の六百五十年遠忌を營まうとする寺もある。宗祖去つて六百五十年、さうして日本に於ても斯くの如く人心が非常な熱度を以て宗教の信仰を求めて居る場合であるから、今迄の小さい　考　を捨てゝ――水を浴びるとか狐を下すとか、理を下すとか、そんな詰らない事の爲にしないで、今迄の穢れた　考　を追拂ふ爲に、素裸體になつて水を浴びて、日蓮主義者として日蓮聖人の前に愧ぢざる精神になつて、此の法を廣宣流布しなければならぬ。（拍手）人に依つては、或はそんな強い事を言つてもいかぬから、さう激しい事を言ふなと云ふ人があるかも知れぬが、さう云ふ聲があつたから今まで數年の間吾輩は默して居つた、默して居つたら改めるかと云へば、改めないてはないか。であるから今日は迚もさう云ふ生ぬるい事をやつて居つては駄目だ、

吾輩は何も面倒なことは言はぬ、又個人々々を攻めて細かな事は言はぬ、唯モッと眞面目な精神になれと云ふことを叫ぶのである。今は法華經が勃興すべき機運である、日蓮聖人が龍の口で御苦勞なさつた、佐渡が島で御苦勞なさつた、其の御苦勞の花が咲くのは今日である。（拍手喝采）團體を組んで龍の口に行つて、此處が御靈蹟である、此處が首の座であると、そんな事ばかり繰返さなくても宜い、モウ分り切つて居る。日蓮聖人の辛苦艱難の花が咲いて實を結ばんとして居る、果實を收獲すべき時は今日である。（拍手）日蓮主義の僧俗とも本當の護法心に歸らなければならぬ時である。是に於て私は如何にも愉快を感ずるのであります。どうしても迷信の狀態を捨てゝ、正しき日蓮聖人の信仰に復活しなければならぬと思ひます。斯くして日蓮聖人の教は、實に立派な、世界最高の經典に基いた教でありますから、益〻隆盛になるに違ひないのであります。

（一一）壽量品を閑却せる大失敗

是は日蓮聖人の仰しやる通り『一叩きして見よ』と云ふことがある。法華經が偉い、日蓮聖人の教が良いと云ふことを試すには、何も難かしいことはない、唯だ一叩きして見よ——コン〳〵と叩いて見れば知れる。此のコッブにしても叩いて見れば分る——御聞きなさい、良い音がするでせう。若し龜裂が入つて居つたらビン〳〵と云ふ。日蓮聖人の教は一叩きして見れば音が違ふ、今のやうな迷信や腐つた有樣では、叩いて見てもボコ〳〵と云ふだらう、だから『一叩きして見よ、日蓮聖人の教は實に立派なものだから』と云ふ確信に立たねばならぬ。それでは聖人の教が何故それ程結構かと云へば、日蓮聖人の人格が立派であらせられたことも無論大切な點でありますけれども、併し日蓮聖人の人格がどれ程立派でも、基くお經が惡かつたならば駄目である、其處を考へなければならぬ。日蓮宗の人は唯だ日蓮聖人が偉い〳〵と云つてしまうから、そこで宗教としての本據が動いて來るのである。基く所が法華經である、法華經の壽量品を提げて日蓮聖人が起たれたから偉いのである。此の壽量品を味つて見なければならぬ、壽量品は毎日讀んで居るのに、それが分らないでは駄目である。芝居でやつても『如來壽量品第十六』と云つて役者が唱へるではありませぬか、（笑）法華宗と云へば直ぐ『如來壽量品第十六』と言ふ。然るに其の壽量品には何が說いてあると云つた時に、答へることが出來ない。之を十人に問へば十人答ふる能はず、之を百人に問へば百人答ふる能はず、之を千人、萬人、百萬人に問へども一人の答ふる者無きに至つては、既に日蓮主義は滅びたと言つても宜いではなからうか。彼の『自我得佛來』と云つて殆んど暗誦的に無意識に讀んで居る、其のお自我偈には何が說いてある、斯う云はれるとハッと驚く、（笑）それは何事であるか。何も七面倒くさい事をゴチャ〳〵言はないでも宜い、壽量品なら壽量品には斯う云ふ事が說いてあると言へば宜い。難かしく面倒くさい事を說けば幾らでも理窟は捏ねられる、そんな理窟を言はうと思ふから言へない。壽量品に何が說いてあるか分らないで日蓮主義が立ちますか。そこでどうしても是からは壽量品を正しく了解すると云ふことが大事な點であるのであります。

（一二）壽量品の題號の眞意義

今日は更に進んで壽量品の先づ表題に就てお話せんければならぬのであります、『如來壽量品』と云ふことはどう云ふことであるか。一體佛經と云ふものは經題は其の經一部の總標と云つて、題號を見れば大體分かるものである。そこで先づ『如來』と云ふことを考へなければならぬ、如來と云ふことは昔流に言ふと面倒な事を澤山云ふけれども、お釋迦樣のことである。即ち釋迦如來である。他の如來を指したのではない、『如來』とは正しく釋迦如來である、法華經に『我』と言はれたその釋尊である。それを何故如來と言ふかと云へば、面倒臭いことも何も言ふ必要はない、『如』と云ふのは眞如と云ふて、眞理と云ふか法性と云ふか、『其のまゝ』と云ふことである。眞理なら眞理其のまゝ——『まま』と云ふのは拵へ物でない、本來其のまゝと云ふことである、有のまゝなるものであります、之に『眞』と云ふ字を附ければ『眞如』となる、一方から謂へば妙法と云つても宜いのであります。其の『如』が『來』と云ふのだから、『來』と云ふのは人間の所に來たと云ふことである、眞如の冷たいまゝのものでなくして、其の眞如を事實に覺つた大人格者である。妙法の儘、眞如の儘汝等を救はんが爲に活きて汝等の前に來たれりと云ふが、是が如來である。（拍手）如來の上に、尙ほ如來より偉いものがあるそれは眞如だと云ふことは間違である。其の眞如が活きて働いて居るもの、即是れ如來である。日本で謂へば日本の國體と云ふものは即ち皇室の上に働いて居る、日本の國體が『如』であるならば、活ける陛下は即ち此の國體の體現者なるが故に『如來』である、然るに憲法あることを知つて天皇あることを忘れ、天子樣は偉いけれども天子樣の上には憲法があると云ふやうな事を言ふのは、飛んでもない大間違である、釋迦如來も有難いけれども如來樣の上には如來の戴いて居る法があると云ふやうなことを言ふけれども、法が活きて動いて居るのが即ち如來である。其の上にモウ一つ法があればそれは如來ではない、凡夫だ。其の法に羽が生へて飛出すか、足があつて動き出したが故に、之を如來と云ふのである、字が既に其の通り『如』が『來た』と云ふことである、『如』が動き出したのである。是は動き出しても動き出さなくても優劣は無いが、寧ろ動かなければ値打が少ない。（壁に向つて眠つて居るのでなくして、此方を向いて活きた吾々を救ふ爲に活躍して居るのを『如來』と謂ふ。さうして此の如來は即ち釋迦如來である、他の佛は『來』と云つても來ない、阿彌陀如來と云つても事實來ないのだから、阿彌陀不來だ。（笑）冗談でも酒落でもない、本當のことだ、如來樣だからと云つても來ないぢやないか、死んでから迎へて下さると云ふけれども、吾々は死なないから未だ遇はない。（笑）死んでから來るのは如來でない。此の『來』と云ふのは生きて居る人間の前に來りたまふ

と云ふことである。死んで行く時分に迎へに來たり、幽冥世界で動いて居るのは、やはり人間の此の現實の世界より云へば『不來』である。大日如來も大日不來である、『フライ』にも色々あるけれども、大日フライ、阿彌陀フライ、皆フライだ。（笑）是は私が初めて言ふので、今までこんな事を言つた人は無い、大正六年八月十二日初めて言つたのである。併しながら此の眞理は萬世に輝くものである、私が『フライ』と云ふたならば、後世人類のあらん限り、阿彌陀如來も大日如來も皆『フライ』と云ふことに改名されるであらう。（笑）釋迦如來に於て初めて此の世界に、淨飯王、摩耶夫人を親として、人類と同じ者として吾々の所にお出で下さつた。併し其のお出でになつた釋迦如來は、八十年で入滅せられたやうに見えるけれども、此の如來の壽命は一體如何なるものかと云ふことに就て、茲に『壽量』と云ふ文字が掲げてある。『壽』は命である。『量』ははかると云ふことである。限りがあると云ふことではない。度量衡の量の字であつて、命をはかると云ふことである。此の人間の世に出られた釋迦如來の御壽命は、八十年で拘尸那城跋提河の邊り沙羅双林の下に入滅せられたとすれば、八十年の壽命に限つてそれきり消えてしまうものか、此の壽命をはかつて見れば、八十尺しかない、八十尺で切れた反物だと云ふ風に見るべきものか、或は表面は消えたやうに見えても、生命と云ふものは消えない、肉體は消えても生命と云ふものは無限に續いて居るものであるか、此の世にお出ましになる前を考へれば、久遠五百塵點劫の始めなき以前よりの實在の如來であらせられ、時を計つて天竺に御出ましになつて八十年の化導を終へて跋提河の邊りに入滅なさつた其の時より、又幾億萬年限りなき後に至るまで常住不滅の如來であらせられるか、此の事を秤量する——秤にかけると云ふことである。であるから壽量品に說いてある事は何であるかと云ふと、一言にして謂へば、今現に吾々の前に活きたお釋迦樣が御座るか御座らぬかと云ふ問題である。肉體は入滅したまうたけれども、本當の活ける佛樣が今吾々の前に實在ましますかどうであるか、と云ふと、『常に此に在つて滅せず』『近しと雖も而も見えざらしむ』斯う云ふ風にお自我偈は凡べて其の事が說いてある。『常住此說法、常住此不滅、實在而言死、實在而言滅』——『我常に此に住して法を說く、常に此に住して滅せず、實にはあれども而も滅すと言ふ、實にはあれども而も滅すと言ふ。此の短かいお經の中に、『實在』とか『常住』とか云ふことが行列して居るではないか。其の實在常住と云ふことを忘れてしまつて、お釋迦樣は死んでしまつたらどうなつたか分らないと云つて、他に信仰を移すと云ふのでは、まるでお自我偈が讀めんぢやないか。（拍手）

（一三）低級なる迷信の弊害

さうすると或は、『私はお自我偈讀まんでも陀羅尼品讀んで居ります』と云ふ人があるかも知れぬが、矢鱈に『泥履、泥履、樓醯、樓醯、多醯、多醯』と言つて何にもならぬ。（笑）あゝ云ふ文句を唯だ無闇やたらに變な調子を附けて、所謂況

ら、に聲を揚げて、『安爾、曼爾、摩禰、摩々禰』と讀んだ所で何になりますか。字の見える人ならば陀羅尼品を讀んで御覽なさい、彼處で鬼子母神がどう言つて居るか。『寧ろ我が頭の上に上るとも法師を惱ますこと莫れ』と言つたのではないか、『自分は法華經を後代に說かうと云つても、學問もなし智慧も無い。此の法華經の法を說く法師は別にある、其の法師が法を說かれる時分に反對をする者は、人間ばかりではない、眼に見えない惡魔の輩も亦法華經の行者を惱ますんとするかも知れない。或は夜叉、羅刹、富單那、吉蔗、鳩槃茶餓鬼と云ふやうな（先づ日本の言葉で言へばお化と云ふやうな）惡魔が蔭からして正法の導師を災せんとする者があらう、それは巡査も捕へられないし、信者も知らない、其の場合には、私は詰らぬ者だけれども、今私が申上げる此の樓醯々々多醯々々と云ふことを言つてさへ戴けば、さう云ふ惡魔は怖がつて決して此處へは來ない、』さうして又惡魔に對して鬼子母神が言ふには、『お前達此の坊さんを憎いと思つたならば、坊さんに手を着けるな、私の頭の上に乘つて地團太踏んでも、土足で此の鬼子母神の頭を踏付けても怒りはせぬから、決して法師を惱ますこと莫れ。後代に法華經を弘めんとする法師、沙門を惱ますならば其の分には捨て置かない、必ずや汝等惡魔を取つて引裂いて、柘榴が割れて地に落つるが如き有樣にならしむるが宜いか』斯う云ふことを鬼子母神が言つて、さうして彼の呪を說いたのであつて、唯だ無闇やたらに破落戸が喧嘩をするやうなことを言つたのではない。寧ろ我が頭に上るとも法師を惱ますこと莫れ——寧ろ我頭上莫惱於法師と云ふことを告げたのであります。然るに此の鬼子母神を有難がる者が、一人も法を說かなくなつて居るのは何事であるか、即ち日蓮聖人の言はれた通り、

徒に遊戲雜談のみして明かし暮さん者は法師の皮を着たる畜生なり。法師の名を借て世を渡り身を養ふと雖も法師となる義は一もなし。法師と云ふ名字をぬすめる盜人なり。（松野殿御返事 一五三〇）

『法の師』とは書いても、法を說かぬから法の師てはないぢやないか、『法の師と云ふ名を盜む盜人なり、法師の皮を着たる畜生なり』と云ふことになつては何ぼ『樓醯々々多醯々々』と云つても、鬼子母神は肯いて呉れはしない。さう云ふ者に向つては、『お前は何も樓醯々々多醯々々と言はなくとも、法師とさへなればそれで宜いのだ』と鬼子母神は答へるであらう。（拍手）

斯う云ふ工合に物は筋を分けて能くお經を見ないと云ふと今日から以後は教育ある人が佛教の研究をし、日蓮主義の研究をして呉れるのである。今迄のやうな西も東も分らぬやうな、低級な無智識な者がワイ〳〵言ふて、少々位數が多いからと云つて、それを以て日蓮主義が物與して居ると云ふことは出來ない。（拍手）ワイ〳〵的の發達を計るならばモッと柄を落してしまつて、法華經も御妙判も皆拔にして、豆腐屋の婆さんでも擔いで、『一列濟まして甘露臺、豆腐が煮えたらどうぢやいな』。（大笑）是で宜い、立派なお經を以て宗旨を立て

るやうな事は考へないで宜い。苟も如來壽量品を奉戴する者が、『豆腐が煮えたらどうぢやいな』では行くまいぢやないか。

（一四）壽量品に對する正明なる信解

そこで其の如來が一つちやんと立ちさへすれば宜い、國家で云へば皇室の尊嚴が明かになれば一國の基礎は其處に定まるのである、宇宙の中に於ては絶對大人格者が定まれば、其處に於て宗教の生命が立つのである。即ち基督教で謂へば、基督及び神其のものが、如何なる者からも打摧かれない、絶對の權威として基督教の神を信じて居れば、基督教には生命がある。佛教では、佛教に立てる本佛が如何なる思想からも打碎かれない。絶對の靈光を放つて居れば、佛教には生命があるのである。國に例すれば王樣が殺されるやうになつたり、他の者から追捲られることになれば則ち其の國家の基礎が動いたのである。佛教では是が本佛であると云つて壽量品に顯本されたる釋迦如來が、他の思想を以て追捲られゝて、佛教と云ふものは根本より動搖したものである。日蓮主義者は佛教の復活を以て任じ、本化上行菩薩が出て其の本佛を光顯せられたる流に居りながら、グジャ〳〵下らない學說を捏ね廻し。又一般の信仰は低級なる迷信になつて、學者は暗愚にして此の根本を忘れ、信者は蒙昧にして此の高遠なる宗教を逸すると云ふことは、如何にもお祖師樣に對して濟まぬことであります。（鳴呼鳴呼）何も面倒なことはない、日本で天子樣が有難いと云ふことは誰も知つて居る、法華經の方では壽量品に現はれたる如來を忘れてはならぬのである。我れ佛を得てより以來、經たる所の諸〳〵の劫數無量百千萬億載阿僧祇なり、汝等が苦みの海に浮きつ沈みつして居るから、我れは汝等を救はんが爲の故に、應に度すべき所に隨つて爲に種々の法を說く、毎に自ら是の念を作す、何を以てか衆生をして無上道に入り速に佛身を成就することを得せしめんと片時も休まぬものである。であるから本化上行菩薩を汝等の爲に日本國へ遣はしたのであると云ふことを、判きり說いてあるのである。然るに日蓮聖人が有難いと云つて本佛を忘れるのは、如何にも愚な話であります。隨分それは屁理屈を捏ねてゴチャ〳〵言ひますけれども、そんな事は何でもないことである。人間の頭腦は健全でなければならないグナリ〳〵下らぬ事を言つて居つては駄目である、少しは人間眞面目に返らんければならぬ。生命に換へても護らなければならぬ宗教の信仰、其の信仰に依つて一切の事柄の根本が立つのである。人間に生まれた甲斐も立ち、國に盡すことも是で出來る、子孫に傳へる己の生命も此處に在る、此の全宇宙に唯一の實は己の信仰である。其の淸き信仰を定めるのに、フラリ〳〵譯の分らぬことを振廻すのは、何事であるか。頭腦が逆上せて居るならば氷でスッカリ冷やして、是なら我が全力の及ばん限り、自分の智慧と自分の分別と誠心と、全身の力を籠めて、是だッと云ふ所にチャーンと定めなければならぬ。基督教などにグズ〳〵言はれて、『成程ぢや、ハハーン』と言ふやうなそんな手落のあることではいかぬ。其處まで確乎と定まつて

居れば刀で斬つても宜しい、十分鍛へ上げて決心したことであるから、今更考へ直ほす所は御座らぬ、首を斬るならば仕方がないからお斬りなさいと云ふ所に、ちやんと行くのである。吾々の命なんと云ふものは果敢ないものである。縱令此處で頸は斬られないでも、何時不意の事が起つて、電車が衝突して潰されないとも言へない、或は急病が起つて斃れないとも限らない。此の最高の信仰と倶に行くならば、他の物は何もなくとも宜しい、己の精神の信仰を喪ひさへしなければ、我が所有の全體は此の信仰の中に在るのである。（鳴呼）それ程有難いものでありますから、モウ少し本氣でやつて戴きたい。

是から壽量品の內容に入つてお話する順序である、今日は壽重品の內容に入つて申述ぶる所存で豫定をして居りました壽量品全體を四回と云ふ豫定で、長行を二回、自我偈全文を二回と云ふ考でありましたが今日は少しメートルを揚げ過ぎて（笑）橫の方へ行つてしまつたのであります。併し是は惡いことでないのであります。細かい理窟をゴチャ〳〵と此の暑いのに覺えても仕方がない、ウント眞面目になつて、如來壽量品に於て本佛釋尊の常住不滅——此の壽量品が無ければ人に魂なきが如く、一切經は死んでしまうと云ふことを考へて、其の壽量品の精神は何處に在るかと云ふことを、一世一代でお聽きになればそれで宜い。唯だ演說を何遍でもフラリ〳〵聽きさへすれば宜いと云ふのではない、之を聽き終りさへしたならば——壽量品を聽いた者は皆悉く歡喜の心を起して、無生法忍に達するのであります、

◎日蓮聖人御事歷を詠じ奉る　熊澤優

御誕生
清水わき蓮は磯に時ならずさくも菩薩の出てますしるし

清澄山入寺
家をいでゝ清澄山へ登るこそのりの道行く初めなりけれ

涕淚石
後髮ひかれて登る別れ路やまろが心ものこる石ふみ

御剃髮
美しき振の袂も今日よりはみ法かゞやく墨染の袖

立志遊學
たらちねのなて給ひけむ黑髮も剃りてみ法の玉と耀く

歸省
諸々のみ法の門を音づるも只一筋を知ることゞ知る

苦學
み佛の法の源さぐりして勇みて歸るふるさとの空

草まくら雪ふみわけて故鄕を法の道行旅衣かな

大廟
いにしへの雪に蓋にまなびして法のさとりも盡しぬる哉

天照らす神も感應まし〳〵てすゞの音淸くひゞき渡りぬ

旭の森
名に高き旭の森は日の本に法をひらきし始めなりけり

さし登る旭とともに日の本に耀きそめしみ佛の道

日蓮聖人教義綱要

井村日咸

第一章　總論

第三節　本化別頭の教觀

日蓮聖人の御教義は聖人獨特の教觀二門を有せらるゝ、古來本化別頭の教觀と稱して居るのはこれである、法華經如來神力品の會上、本佛釋尊より本化上行等の菩薩に別付囑せられたる法門なるが故に斯く云ふのである、然しながら別頭と云ふても、佛教教觀の大綱を逸したものではない、本化別頭と云ふから、佛の教の外に、本化の菩薩の考案せられた特別秘密の法でもある樣に考へて居る人もある樣であるが、苦しもそう云ふ人があつたならばそれは誤解である、そう云ふことになれば本化の菩薩は佛教徒ではない外道の法を傳へることになる、そんな道理のあるべき筈のものではない、別頭と云ふことは、迹化の菩薩の總付囑に對して、本化の別付囑があつたから、別付囑を指して別頭と云ふたのである、迹化本化の付囑の儀式の逐目から起つた言葉であつて、決して釋尊を相手として言ふ事ては無い此點は誤解のない樣に豫め御注意申上げて置きます

扨て本化別頭の教觀と云ふは、前節に御嘶致した教觀兩門に於ける各要目に就いて、最も其根源となるべきもの、統合歸一せられたる歸着點を示されたのが本化別頭の教觀と稱するものである、以下各要目に就いて其大體をお嘶致します、

一佛陀。

娑婆世界の教主釋迦牟尼佛は、成佛してより已來甚だ大に久遠なり壽命無量阿僧祇劫にして凡夫淺識の忖度すべき處にあらた、それより已來毎自の悲願暫くも廢し給はず、我等娑婆世界の加被し給ふ、本佛世尊は我等衆生の上に衆生の大導師なり、大依止處なり、大良福田、大船師、大醫王、大調御師、眞の善知識なり、救處なり、護處なり、我等衆生は本師世尊を離れては何れの處にか救護を求めんやである、本章第一節に經文を引いて釋尊の慈悲の甚大なることは詳しくお嘶を致して置きましたから省略して置きますが、再三繰返して御覽を願ひます、斯樣に吾等は釋尊已外に救を求むべき處はない、唯我一人能爲救護の金言は肝に銘じて忘るべからざるにも係はらず、末世の衆生は如何なる天魔に魅せられてか、斯る貴き大慈悲ある御佛を打捨てゝ、我娑婆世界には、緣も由緒もなき東方淨瑠璃世界の藥師佛西方安養世界の阿彌陀佛を信仰し、教主世尊誕生四月八日滅十二月十五日の聖日を二佛の忌日に割宛てる樣な不都合の行爲を爲すに至つた、此有樣を見て猛然起つて斯る不孝不信の輩を折伏すべく大師子吼せられたのが日蓮大聖人である、日蓮聖人一期の弘通は、教主釋尊の大慈悲を我等一切衆生に覺知せしめ、釋尊は我等が眞の父であり、眞の師匠であり、眞の主人であることをお教へ下されたに外ならぬのである、宇宙には佛と云ひ、菩薩と云ひ、諸天善人と云ひ我等に少分の力を與へて下さるゝお方々

は澤山にあるけれども、其澤山の神佛の中心であり本源である處の本佛釋尊の大慈悲に攝取せられ、其救護に俟たねば、我等は現在の苦惱より解脫することは出來ないものであると云ふことを、法華經本門壽量品の開迹顯本の教義に依りて顯說せられましたのが、本化別頭の佛陀觀であります

二教法。

本師世尊は無始已來衆生を愍念し給ひて、常に娑婆世界に在つて說法教化し給ふ、然るに諸の衆生は種々の性、種々の欲、種々の行、種々の憶想分別あるを以つて、若干の因緣譬喻言辭を以つて種々に說法し給ふ、衆生の根性千差萬別なるを以つて、如來の說法亦無量なりてあるが、無量の說法は如來の眞意にあらずして、衆生の性欲に隨從する一時的方便の說法なれば、遂に其方便權假の說法は開顯せられて一乘の法に歸するのである、世尊の世々番々の御出世に當りて常に斯くの如く繰り返さられて居るのであるが、今番の出世即ち、今日の吾等が歷史上の佛陀の出現に就いて之を見るに、先づ成道已來四十餘年の說法は、衆生の樂欲に隨順したる三乘方便の教である、無量義經の中に諸の衆生性欲不同なれば種々に法を說きし、種々に法を說くことは未だ眞實を顯はさず、是の故に衆生の得道差別して疾く無上菩提を成することを得ずと說き法華經方便品に至つて今正しく是れ其時なり、決定して大乘を說く、又、世尊の法は久しくして後、要らず當に眞實を說き給ふべし、とお說きに爲つたのは、方便眞實の關係をお示しに爲つたのであるが、更に一歩を進めて、

如來は但一佛乘を以ての故に衆生の爲めに法を說き給ふ、餘乘の若は二若は三あることなし、中略劫濁亂の時は、衆生垢重く堅貪嫉妬にして諸の不善根を成就するが故に、諸佛方便力を以て一佛乘に於て分別して三と說き給ふ、中略汝等當に一心に信解し佛語を受持すべし、諸佛如來は言に虛妄無し、餘乘有ること無く、唯一佛乘のみなり、

とお說きに爲つて、四十餘年の三乘方便の說法は一佛乘の教に開顯統一せられて三乘の教は破廢せらるべきものなるをお示しになつたのである、此三乘一乘の教を相對して開顯を論ずるのは、世尊の今番出世の一代の說法に就いての開顯のみである、此は法華經迹門の開三(權)顯一(實)の法門と云ふのである、然るに釋尊の御化導は今番一世のみでないことは前來申上げた如くであるが、そうすると、方便品の開三顯一の法門丈では未だ徹底せざる處がある、そこで久遠劫來の御自分の御化導に就いて開顯統一を論じて其歸趣を御示しに相成つたのが、本門壽量品の開迹顯本の法門である、壽量品の開迹顯本の法門は竪に三世を貫いて其中心は何れであるかを示し、横に十方に透徹して其中心歸着を示したのであるか故に迹門の法門の如き狹小なるものではない然らば、壽量品の開顯とは何を言ふかと云ふならば、現在出世の釋尊を中心とし此娑婆世界を中心として三世十方に押擴めて行く大理想である、即ち、壽量品に今の釋迦牟尼佛、成佛してより已來無量無邊百千萬億那由陀劫なり中略是よ

り已來、我常に此娑婆世界に在つて說法教化す、

と說かれてある、今の釋迦牟尼佛と云ひ此娑婆世界と言ふは、其中心點を今の佛と此の世界に置いて、此佛此世界より三世十方に、佛陀の大慈悲を擴充して行くと云ふのであつて、大慈悲の源泉を現在の釋尊と此世界に取つたことが大なる尊き意味合となるのである、此中心點を開顯した御經文なるか故に法華經の壽量品は釋尊一代の經々の中心點と爲るのである日蓮聖人の觀心本尊抄に

又本門に於て、序正流通あり、過去の大通佛の法華經より、乃至現在の華嚴經乃至迹門十四品涅槃經等の一代五十餘年の諸經、十方三世諸佛の微塵の經々は皆壽量の序分なり

と御示しに相成つたのは此意味である、斯樣な次第でありますから、法華經の迹門方便品は釋尊今番出世の經々の統一點を示し、本門壽量品は三世十方の諸佛の經々の統一歸着點を示されたのであるが法華經壽量品は三世十方の諸佛の教法王と相成るのであります、

その教王壽量品を更に結束して五字一音の妙法蓮華經として、此妙法五字の內に釋尊の因行果德の二法を咸く含蓄せしめて一法も殘す處なく、本化上行等の菩薩に御付囑に相成つたのが神力品の結要付囑と稱せらるゝものである、今日蓮聖人の教義としては、此妙法五字の內に一代の教法を結束し、末代吾等の信受すべき教法王として御示し下されたのであります、聖人の遺文に

されば如來一代の教法を擣蓼和合して妙法一粒の良藥に丸せり（聖愚問答抄）

と仰せられるのは此意味である、妙法蓮華經の五字を以つて一切經王とし教法王とし見るのが本化別頭の教法觀である、

三僧伽、　如來化を施し給ふには時を鑑み機に應じて其宜に隨つて赴物し給ふ、如來の滅後亦爾なり時に正像末あり、玆を以つて、如來滅後機に熟不熟あり、小乘經を阿難迦葉の弘教を定め給ふに、大乘教及法華迹門の法を普賢文殊等迹化の菩薩に付して正法の始め五百年に之を弘め、權大乘教及法華迹門の法を普賢文殊等に付囑して正法の後の五百年を像法一千年の間の弘教を爲さしめ給ふ

然るに末法の時は五濁の生、鬪諍堅固白法隱沒の時なれば、迹化等の菩薩の其任に堪ふる處にあらざるを以つて、特に本化の大薩埵上行等に之を付して末代の弘教を爲さしめ給ふた、末代の吾等は上行等の本化の菩薩に導かるゝにあらずんば解脫の目的を達することは出來ない、遺文に

此等の末法の時のために、教主釋尊多寶如來十方分身の諸佛を集させ給ふて一の仙藥をとゞめ給へり、所謂妙法蓮華經の五の文字也、此文字をば法慧功德林金剛薩埵普賢文殊藥王觀音等にもあつらへさせ給はず、何に況んや迦葉舍利弗等をや、上行菩薩等と申して四人の大菩薩まします、此菩薩は釋迦如來五百塵點劫よりこのかた御弟子とならせ給ふて、一念も佛をわすれずまします大菩薩を召出して授けさせ給へり

（妙法曼陀羅供養抄）

とあるが、本化の大菩薩ならでは末代の一切衆生を導き給ふこと能はざるが故に特に本化の菩薩を召し出して、此法を御付囑に相成つたのである、此本化の菩薩

が末代に御出世に相成つて、我等極惡の衆生の爲めに說法利生の御化導があるのである、故に本化の大菩薩を以つて末代弘通の大導師と仰ぎ奉つて、末法時機相應の僧寶と致すのである、此が本化別頭の僧迦觀である、

以上お噺致した本佛釋迦牟尼佛、本法妙法蓮華經、本化上行等の諸大菩薩、此三つを本門常住の三寶と云ふのである

三寶
- 佛寶
  - 本佛 — 釋迦牟尼佛
- 法寶
  - 本法 — 妙法蓮華經
- 僧寶
  - 本化 — 上行等菩薩

歸依三寶は小乘阿含の始めより、佛陀の一代の經法を通じての法式であつて、教の淺深勝劣はあれども三寶恭敬の形式は少しも變りはない、敎義の意義に依つて其所尊の三寶の內容に於いて差別は生ずるが、其三寶を尊奉する根本意義には少しも變りはない、今法華經本門の敎義に依る三寶は、一切の佛寶、一切の法寶、一切の僧寶の中に於いて、最も其根源となるべき三寶、統合歸一せられて其歸着點となるべき三寶を撰出して、我等衆生の尊信すべきものと御敎下されたのが日蓮聖人の敎義で、日蓮聖人は已上の三寶樣を一括して『本門の大本尊』として光顯せられたのである、此大本尊は佛滅度後二千二百二十餘年の間一圓浮提に於て冒て之を顯はしたる人は無い、日蓮聖人始めて之を顯示し給ふたる處なるが故に、聖人は觀心本尊抄の中に

是の如き本尊は在世五十餘年に之無し

八年の間但八品に限る、正像二千年の間は小乘の釋尊は迦葉阿難を脇士と爲し、權大乘並に涅槃經法華經の迹門等の釋尊は文殊普賢等を以て脇示と爲す、此等の佛を正像に造り畫けども壽量の佛ましまさず末法に來入して始めて此佛像出現せしむべき歟

と仰せられ、御自筆の大曼陀羅には佛滅度後二千二百二十餘年の間未曾有の大曼陀羅也との御讃文があるのは、此三寶であつて、正像二千年迹本化別頭の三寶の化の菩薩等の與り知らざる處であると云ふことを言ひ顯はされたのである、此本化別頭の三寶が末代吾等の眞の救護者である、我等は此本門常住の三寶樣を離れては到底救護を得らるべきものではない

此三寶樣が吾等衆生に慈悲を垂れ給ふて如何にしてか、此等を敎化して佛道に入らしめんと御苦心遊ばさるゝ、其處が本化別頭の敎門として、日蓮聖人を通して我等罪業深重のものに傳へられて居るのである、

以上の三寶は前節に申上げた敎門、即ち

佛陀 → 敎法 → 僧伽 → 衆生

の中の前の三間題に就いて本化別頭の敎門としてお噺致したのである、此次には本化別頭の人身觀をお噺致して、更に觀門に就いてお噺を致します。

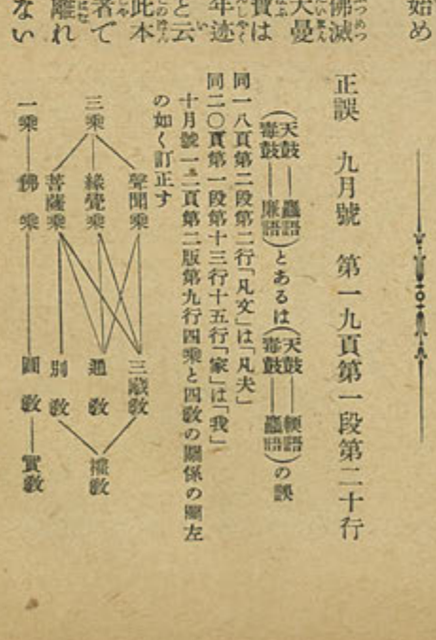
正誤　九月號　第一九頁第一段第二十行

（天鼓 — 雷鼓 — 麤語（麁語）— 厖語）とあるは（天鼓 — 雷鼓 — 麤語（麁語）— 輕語）の誤

同一八頁第二段第二行「凡文」は「凡夫」

同二〇頁第一段第十三行十五行「家」は「我」

十月號一三頁第二版第九行四乘と四敎の關係の圖左の如く訂正す



機微譚語

山根青村

四三　積功累德

公岩倉具視は維新の功臣なり、大節善斷劍の如き人なり。嘉永安政の頃、幕政綱紀弛みて物情騷然たり、具視孝明天皇の皇妹和宮の降嫁を說いて公武合體の大策を建つ、志士目するに佐幕の大奸を以てし、政敵蝟集身頗る危し、父具慶と議して文久二年九月難を西加茂靈源寺に避け、其十五日岩倉家祖先の祠堂を拜し祝髮して僧形となる、斯くて丹波常照寺に赴かんとせしが故ありて果さず、葉室の西芳寺岡崎の永陽菴等轉々具さに苦辛を嘗む。祖叔父靖翁の住寺たる永陽菴に遁れし翌日、靖翁所用ありて老僕を召連れ外出せり。公止むなく飯を炊ぎしに、生れて始ての薪水釜底の米粒は黑焦となり、釜口の米粒は爛熟して粥の如く、日暮靖翁歸り來りて公と共も之を喫ひ、洪笑を禁じ得ざりしと。既にして父具慶の猶子たる西芳寺神湫來り迎へて其後園の茅廬に寓せしむ、公雜僧と共に箒を執り井水を汲んで酒掃に從事す、神湫公の無聊を慰めんものと名器を室內に具ふ、公親ら小鋸を執りて茶博士の用法の如く長短を揃へて炭を截る、炭屑飛散して鬚眉眞黑々となる、神湫之を見て「宛然崑崙奴の如し」と苦笑す。公又時節柄四肢を强健にするの必要を感じ、破笠を戴き糞桶を擔ひ長柄杓を執て肥料を菜園に灌ぐ、其容姿を見て「全然案山子の風に搖ぐやうに御座ります」と呵々大笑す。公之を聞き大息して曰く「斯の如き些事も況んや是より大なる事業に於てをやと」

（維新史實）

然り慣れざれば些事も猶ほ且つ滿足に出來るものにあらず、之に反して熟練すれば難事も美事成し遂ぐるもの、他人の可能事が自己に不可能と云ふは、不可能にあらずして爲さざるなり、泰山を挾んで北海を越ゆるにあらずして長者の爲に枝を折らざる也。何事でも熱心と努力だに充實せば屹度出來るものなり、職に人類教化にあるもの一段の覺悟を要す、それには他人より一倍の努力を要すること勿論なり。努力なく熱心なく寢轉んで居て棚牡丹を夢むる橫着奴は、宜しく其面に唾すべきなり、農夫猶ほ且つ晨に星を戴いて出て夕に月を負ふて還るの努力なくんば、穫々の收穫は得られざるなり、さてこそ粒々辛苦の熟語さへあり、況んや思想問題を取扱ふ敎育宗敎の重職に在るものをや。此意味に於ける聖日蓮の警策鞭打の御聲、須らく眷々服膺すべき也。

聖語　我が門家は夜は眠を斷じ晝は暇を止めて之を案ぜよ、一生空しく過して萬歲悔ゆること勿れ（富木鈔）

四四　無駄は禁物

江原素六翁の物語に曰く、侍は決して無駄な事をしてはならぬとは昔より武家の家訓の一なり。余幼時或家に給仕として傭はれしに、其家の老主人は極めて盆

栽を愛翫し、毎朝早起眼鏡を掛けて深切丁寧に盆栽の蟲を拾ふ、余も子供心に手傳ふ心持にて盆栽の蜘蛛の巢を拂ひ居りしに、老人叱して蜘蛛の巢を拂ふべからずと戒む、余は意外に感ぜしが其後老主人の折々巢を拂ふを注視せしに、小さき蜘蛛が巢の上に這ひ出るを見るや、手早く之を摘み殺し、然る後巢を拂ふ。若し巢をのみ拂へば蜘蛛は直ちに復巢を懸く蟲を捕へずして巢を拂ふは無駄骨折なり武士たるものは些事と雖も無駄は禁物なりと、老人に笑はれ且敎へられたりと。

げに無駄骨折ほど氣のきかぬ物はなし唯やみ雲に努力すれば迚存外仕事の捗どらぬ事あり、あと戻り二度手間の鈍痴をやればなり。國民思想の發達誘掖特に然るものあり、如何なる時代にも思想界を毒する蟲はあるなり、巧みに鬱陶しき巢を作る蜘蛛はあるなり、有毒瓦斯、蒔き散らす害物はあるなり、手ぬるき曉諭諷諫位て巢を拂つた積りて居るのはチャンチャラ可笑しき無駄骨折なり、宜しく眞向正面より男らしく鐵錐を喰はすべきなり、思ひ切りて其毒蟲をひねりつぶすべき也。一殺多生は如來の金言なり、さてこそ聖日蓮は微溫的說き方を避け、衝き込んで苦諫し切言す、時弊救濟の適確なる歩み方はこの事この事。

聖語　彼法師原が頸をきりて鎌倉由比の濱に捨てずば、國正に亡々たるべし（法華鈔）

生命及び其の起原に對する史的考案

文學士　武田顯龍

ヱンペドクレースの說

紀元前五世紀に希臘に出たエンペドクレース氏の生命に關する見解は最近の生物學者の見解と多少類似して居る。此の人は前者と同樣に生物は土から出來たと云ふのであるが最初に出來たのは植物であつて是は太陽の照さない時である。それから次第に進で動物が出來、更に進歩して發展した結果人間の如な者が生成したのである。人間の如な物が出來たに就ても初めから一足飛に四肢五體の完美した物が出來たのではなくて個々の肢體即ち或る者は眼、或る者は手、或る者は足等が出來個々別々に出來たのである。然し其が出來ると共に滅失して、個々の肢體は一度は固まつて又漸時に滅した。如何して固まつたかと云ふと其は愛の力に據つたので初は不恰好な形が出來たが後破滅したのである。其に續いて動物殊に人間が出來たのだか初から立派な形ではなくて次第に發達したのである。即ち氏の說に依れば生物發生には三段階あつて第一が植物、第二が肢體、第三が人間。斯くて是が次第を追ふて發生したことに

なる、氏の説は進化論的傾向を帶びてるが彼は植物にも性質を認めて居り又有機體に目的に合する物あることを説いてる是に續いて重大なる彼の説は身體と精神との關係であつて彼は精神を説明して云ふのに精神は天界から地上の生活に下つたものであつて人間、動物、植物の身體中を經廻つて居る、即ち輪廻をなしてると説くのであつて佛教の輪廻説と思ひ合せて仲々に興味深い。精神は輪廻して日が若し之が淨められた時は天上して再び神の下に歸ると説いてる。斯る見解から見ると彼の考は初め土から生成したとは云ふものゝ精神を重視したのは明である

ピタゴラス一派の説

エンペドクレース氏の輪廻説は**ピタゴラス**の哲理に基く如に思はれる。佛教の輪廻は六道であるのに彼のは三道である

ピタゴラス一派の人は精神の輪廻を信じて約一萬年間には世界が舊態に立ち歸るそして微細な點までも發生して消滅するまでの經過道程を繰り返すのである。是佛教で云ふ成住壞空の考へで希臘の古代哲學殊にピタゴラスの哲學は印度の哲學に酷似して居る。ピタゴラス派の哲學は死後償ひのあること、即、善因善果惡因惡果の因果應報説を唱へて居る。**エムペドクレース**の考は此の**ピタゴラス**派の哲學思想と結合した如てある。生命を論ずるに當つて大切なことは心身分離の考てある。**エムペドクレース**は精神の輪廻説を述べて是が永久不滅なことを主張したが彼より先に出た**ピタゴラス**一派は心身を嚴密に區別して云ふのに精神が身體と結合して埋れて居るのは罰に因るのて身體は一個の牢獄てあると説いてる。是を罰した者は神樣てあるから自分自身で自由勝手に此の牢獄から解放されると云ふことは出來ない、精神が身體から分離した時に天界に至ることが出來る。其處に肉體なき生命を得ることが出來ると云つて肉體と精神とを分離したが然し天界に行くには行くだけの善行をなした者でなくてはならない。若し善行をなして居ないとすると肉體の罪を償ふことが必要てあるからタルタルス即地獄に行つて償ふのてある。心身の結合は前世に犯した宿惡に因るのてあつて天に昇ると地獄に下るとは生存中の價値に因るのだと主張して心身を分離した此の心身分離説は**ヘーラクライトン**の説にもあるが充分ではない。唯物理的客觀的現象なる火を精神と見て肉體と區別したばかりてある。此の心身の區別分離は**プラトー**に至つて最高度に達した。**プラトー**は其の哲學説が觀念論だから精神を重視し過去現在未來の三世説を信じて居て云ふのに過去の經驗記憶を現世に於て經驗することがある。是は前世の記憶て吾人が物を學ぶも前世の記憶に據るのてあるとなして吾人の生活は肉體の牢獄中に束縛せられるから早く自由な天界に歸らうと考へ天界を憧憬し天界に對する愛を唱へ天界に歸るを未來とした。斯の樣にして彼は生命を精神的に見て肉體を輕んじたのてある。此の生命を精神的に見る考方は啻に**プラトー**のみてなく他にも澤山あるが**アリストテレース**は生命とは自發的の營養發生增大及び減退てあると見て餘程生理的に傾いたが、然し生命を精神的活動てあると見た點から云ふと全く生理的だとも云へない、植物も精神を有つてると考へたのてある。スウエデンの學者**ボストレエム**は生命は自覺てあると云つてる**ショーペンハウエル**は精神的に見て生命を意志とした。**オイツケン**なぞも精神生活と云つて生命を精神的に見て居る。兎に角哲學者の大部分殊に重立つ者は皆精神的に見て居るが之と反對に生理的研究が發達して哲學者と全然反對の見解を取るものもあつた、其の祖とも云ふべき人は希臘の**ヒツポクラテス**てある。

生理學者の生命觀

ヒツポクラテスは希臘の最初の醫者てあるが彼及び彼の一派は**フニヨーマ**と云ふことを唱へるのてある。是は極て微細な空氣の如な物てあるが人間は肺て之を吸收して血に送り血は是を身體全部に送ると説くのてある即ち生命はフニヨーマに依て左右せられると唱へるのてある。其の後**エラシストラス**。**アタナウス**。**ハープエイ**。**ハルレル**。**ミユルラー**。等を經て生理學は大に發達したが今日の發達した生理學は其職實に生命の解釋てある

課題和歌發表「舟時雨」

子爵　清岡長言選

○まよなかにかぢ枕せし舟人の夢をとろかす村時雨かな　木所區　勝田　宣和

○冲とほくかへる小船の急げるは帆柱たかくしくれふるらし　青森市　宮田　雲黃

○しくれふる夜半の海はら老の身の寒さにたへぬふねの中かな　千葉縣　笠見　樂也

○吹しきり時雨に笠もとりあへずしととにぬれて渡す船人　同　福島　正之

○家つとにしきのもみちかさしつゝかへる小舟に時雨ふるなり　三重縣　辻本由起子

○船窓のぬれたる見れば曉方の嵐まじりに時雨ふりけん　播磨　森下　照轡

○心までさひしくなりぬ村時雨よせ來る波に舟もゆられて　越前　秋葉　純一

○わびしさは一きわませり夕時雨沖の最中に小舟うかへて　同　秋葉　日敬

○山のはのもみちのいろもうちしぐれ靜に暮るる舟の中かな　日本橋　芥川　泰雄

○時雨るれはとくかへらんと藻刈舟苦ふきおろす大崎の海　遠江　佐原　弘風

○芦の湖に舟を浮へて好き友と樂しむ中を時雨けるかな　名古屋　有田　麗湯

○舟ならは遥ひ來るものはなきものをふたゝび訪ひぬ夕時雨かな　同　有田　信子

○見渡せは鏡のごとき芦の湖に浮へる舟に時雨來にけり　同　有田　日篤

○川舟の平瀬を渡るつかの間に風音たかく時雨ふるなり　備前　原田　日男

○舟時雨さこそ昔もしのはれて妙のみのりを唱へけるかな　千葉縣　並木　博

○天の原そらには星の見ゆれとも棹とる舟に時雨ふるなり　同　並木　うめ

○朝の出と今はひきかへ友舟も見へすなるまて時雨しにけり　千葉縣　林　ゑみ子

○紫の暮うち弱りて朱ぬりする殿名召す舟の時雨れてそ見ゆ　小石川　松尾　清明

○刈り盡す詠めの廣き田の中に時雨降る日の里の稻舟　千葉縣　武津興至白

○佳作

○湖に舟をうかへて待ちわひし友よりさきにと時雨かな　名古屋　有田　健山

○白ら〳〵と矢走の浦の夕時雨おはれ〳〵て戻る舟かな　長野縣　松田嘉壽馬

○大模をは積みてこきゆく川舟に紅葉もちりて時雨ふるなり　千葉縣　渡邊　乾航

○あらしやま雲のかゝりて保津川を下す小ふねに時雨ふるなり　京都　中野　正甫

○かのきしにときゆく船のつかぬまに時雨そめたる刀ねの川上　下總　星野　聚祐

○浜のうへに日數重ねてむら時雨ふるすとおもう舟のうちかな　木郷　熊澤　優

○もしほ焚く浦の苫舟時雨して煙たゝよふ夕暮の空　上總　北島　龍

と主張するやうになつた。今日の生命に關する諸説の中には隨分色々な者が混入してる哲學者の説に生理學者の説其にダーウインの進化論が影響を與へ更に獨乙の唯物論者にし動物學者なるビユヒネル。カールフラーグト。モーレシヨツト。等の生命を物質的に見る思想があつて混度雜然としてる。然し大體に分ければ生理學者、進化論者、唯物論者が相ひ合して生命を物質的に見て哲學者の精神的に見る思想に對恃してる有樣である。ところが哲學者の中でも自然科學から發達した唯物主義者及び實證主義者は又從來の哲學者の生命の見方とは異つた見方をなして居るが兎に角一方物質的に一面又精神的に生命を解釋して從來の諸説を調和し稍公平な立場を取らうと努めたのがスペンサーとプントとである。

スペンサーは生命を物質、精神の二面の物として生命とは「外的關係に對して己即ち内的關係を不斷に調節せしむるに在り」と定義して居る。

プントは生命を物理的、機械的、生理的、心理的に見て周到に觀察して居るのである。

現今の生命觀を大別すると機械觀（デカルトの創唱）と活力論又は生氣論と擬活力論と非活力論と新活力論と心身平行論超絶論等である。

之を要するに哲學者科學者等は生命及び其の起原に關して諸種に議論はするものゝ要するに一家の私説で萬人を首肯せしむる程の説は未だ出ない。從て生命の問題は今尚彼等に在つては未解決の問題である、未解決と云ふことは現在に留らず永久に未解決であるだらう。何となれば彼等が唯單に智力にのみ賴つて分析、綜合の結果に據つて此問題を解決しやうとすることが誤謬である。彼等は物質的に生命を見ると生命は滅失してつまらないものと成り終るから永久の生命を與へ樣と思つて自然科學者自が色々と工夫して議論を出してる、此の事も何れ機會があつたら稿を改めて論じてみやう。兎に角生命問題の解決は宗教に信賴するの外斷じて他には方法がない。

○蔦紅葉なをうつろはぬ山の端のしくれてけふる宇治の川舟　京都　安良　日將

○月見むとをすまきあけし舟はたに時雨ふるなり木の葉まちりに　三重縣　辻木紅葉子

○和田の原夕日は落ちていさりする海人の小舟に時雨ふるなり　丹波　廣岡　圓

○うたひつゝ野川を下る稻舟に日は照りながら時雨ふるなり　播磨　森下　馨

○さなきたに舟路さひしき夕くれを物おもへとや時雨降るらむ　淺草　山根　日東

○とまり舟水の音だにさひしきにさひしさふなる小夜時雨かな　越前　秋葉もよ子

○瀬戸の海や淡路島山打しくれぬれつゝ歸るあまのつり舟　長野縣　太田　篤夫

○山々の嶺をつゝみて富士川のうねのうちまて時雨きにけり　京都　竹木　蓮一

○隅田川ゆふつげ鐘もしめりつゝしくれ縫ひゆく渡し舟かな　淺草區　落崎　芳子

○かものとふ深邊のあたり時雨してかり人さはく舟の中かな　雜司谷　矢野　涙子

○姫君の紅葉の船に召す舟の軸のみぬれて時雨去ぬめり　小石川　松尾かね女

○世渡をからくいそしむあまを舟まださちなきに時雨ふるなり　小石川　竹内　軌榮

○寢つかれぬ舟路の旅にふるさとの空なつかしき小夜時雨かな　大阪市　長尾猶之助

○人　下谷區　小柳　英夫

國まもるいくさのふねのけふりさへそらにぬれてや時雨ふるらむ

○地　京都　荒木勢つ子

夜をふかみ灯影もくらき苫船にふるとしもなきむらしぐれかな

物質精神平均の充實生活

遞信技師　小關三平君

私は自分の信仰生活に於ける最近に有難いと思つた事柄を、一言申上げたいと思ひます、僅の間御靜聽を願ひます。

數月前私は或る一富豪の述懷を聽きました、其人は或る會社の社長でありまして、現下の大戰の關係に依りまして、漸く兩三年の間に千數百萬圓の財産を造り上げた、所謂成金てあります。其人の言ひますのに、「自分は幸運にも斯く富裕の身分となつて、まア物質に於ては何等不自由を感じないのである」と言ふ、大分色々考へるやうになつたと見えるのてありますが、「て自分の過去を追懷して見ると云ふと、眞に親の恩が有難い、廣大なものであると云ふことを、非常に感じて來た、そこてどうか親を自分の思ふ存分喜ばせたいと考へて、色々の方法を執つた、無論金に不自由は無いから、親の身の周りの事杯はすべて不自由なくいたし又家屋も立派なものを建て、親を自動車に乘せて方々に遊山をし、見物をさせる又色々御馳走を並べて、綺麗な女などを侍らして、有ゆる手段を盡したけれども一向親が喜ばない、却つて煩さいと云ふやうな風てある、そこて自分は據なく自分の兄てある親の家の相續人に立派な家を造つてやつて、金も十分に遺り、安樂に暮して行けることにしたならば、親が幾らか安心をするだらうと考へて、それで無理に滿足した」と云ふことを聽きました。何と感れな狀態ではりませぬか是の如く巨萬の富を得て居りながら、其心事は洵に憐れな者てあります、私は過日五六日の暇を得ましたので、自分の鄕里てあります和歌山縣の川邊に歸りまし

○天　千葉縣　春日よし子

おきつ波よするかたへの浦風に時雨てかへる海士のつり舟

○選者

さす舟の棹のしつくとおもひしは一むらすくるしくれなりけり

△十二月　課題『歳暮祝』（此分締切必ず十一月末日迄）

△新年　課題『海邊松』（此分締切必ず十二月十日迄）

（選者の御都合ありて必ず十日迄に）

▲天位には選者の短冊を呈す（御受取の上は其旨御一報を乞ふ）

▲用紙半紙半切。一人一題三首迄とす

▲字體は正しく認め一枚毎に住所姓名記されたし

▲統一俳句課題發表

序列を缺ぐ

○鶯　京都　遠々庵

○大鷲の檜に近づく雀かな

△評　檜内での迂氣者、檜外での大膽者

て、一年振に自分の親を見舞ひました、母はありませぬが、父だけが居ります、さうして今年七十六歳の老齢であるにも拘らず、元氣であります顔を見まして、父も亦私を視非常に嬉しく感じました、父も亦私を視まして非常に喜びました、私の父は餘り話をしない、口數の少い方であります、私も餘り話をしないのでありますが、兎に角其悅ぶことは非常でありました、固より私の家は小さな家であります、又親と一緒に飲食をするに致しましても、漸く――私の國では鰹が大變獲れるので鰹の刺身で一杯やる位でありまして、前に申しました富豪などと比べますと非常な違でありますが、父の悅ぶことは非常であります、其當時私は前の富豪の述懷を思ひ浮べまして、實に自分は有難いと思ひました、物質に於ては私などは其富豪と比べますと非常な違でありまして、月とスッポンと申しますか、迚もお話にならない、併ながら其富豪は親を悅ばせたいと云ふ心があつても、どうしても滿足する位に出來ない、然るに自分は物質的に於ては非常に貧弱の者でありますが精神的に於ては是だけ親の悅ぶのを眼の前に見ることが出來ると云ふのは、實に自分の信仰生活に入つて居るお蔭であると思ひまして、つく〳〵自分は有難く感じました。

涅槃經にはお釋迦樣が、財施の食と法施の食と云ふことに就て、餘程力を入れられてお說きになつて居ります、即ち財施の食は物質的生活であります、法施の食は精神的生活であります、お釋迦樣は此精神的生活と物質的生活は偏廢しては いかぬ、若し物質的生活の方に傾いてしまつたならば、人間の世の中は怨み、嫉み、悲み等の爲に精神が始終不安であつて、人間の幸福と云ふことは全然無くなつてしまふ、又精神的の方に全く傾いてしまつたならば、第一番に人間の生命は續かない、從つて自然社會に活動する根源となる力が無くなるであるから、此二施の果報は等しくして異なしと云ふことを、懇々と慈訓を垂れられて居るので あります、此慈訓は洵に有難い事である と私は感ずるのであります、人生を渡る一番大事な點は、心の中に常に歡喜の念が滿ちて居つて、それから活動の力が湧いて來ることである、此點が一番大事だと思ひます、物質的生活も無論今申した通り必要でありますが、精神的生活の力が缺げてしまいますと、此人生は洵に落漠たるものとなりまして、人生の本當の味ひを感ずることが出來ない、又人生てあります、前に申上げました富豪の如きも、モウ少し精神的の方面に心が向いて居つたならば、其富が更に其人の幸福を來すのみならず、人を益し世を益し、其處に非常な善根功德を積む所の力が出て來るのであらうと思ひます、て今後は皆樣と共に、本圓の總裁本多猊下の御指導の下に、互に手を取つて、所謂日蓮聖人の申されました異體同心となつて此法の爲めに、道の爲に、盡したいと思ひます、聊か自分の最近に感じた所を述べまして、御懇親を願ひ、又御指導を仰ぐ次第であります。（拍手）

（和歌天位に呈す）

本誌　松尾皷城筆

本誌　松尾皷城筆

○弦月や鷺の纜ある岩頭　咲香女
○書院暗く名畫の鷺の古び戲　同
○岩上に鷺大蛇は首をもたげ鳧　慶山

△評　男潭に落つる想像の一構圖

○强風を衝き切る鷺の羽振り戲　青村
○小春日や閃き切る池に鷺の來て　不二子
○鷺飛ぶや荒穢畑に風すさむ　京都　春洋
○死傷五萬泳る廣野や鷺翅る　上總　鐵牛
○群鳥は皆死したるか鷺羽振る　同
○外れ玉の反響して鳥鷺晴るゝ　懷光
○雨霽に佐渡は隱れて鷺の飛　青森　惟泡
○家數も皆さぬ里あり鷺の嗜　同
○鷺飛ぶや岬遙に涙の花　同
○深山路や鷺に逸こむ峠茶屋　直水
▼此外鷺の巢の類多かりしも春の部に屬すれば採らず

○評者の句

○霧深み旅人小さし鷺の飛ぶ　皷城

○冬の蝶、冬の蠅、冬の蜂

序列なし

○またしても筆にからむや冬の蠅　青村

△評　南窓淨机の邊り力弱く一疋の蠅がまつはる、楚々として筆の音を立てつゝある主人を見る

○手枕や日で追ひやる冬の蠅　かね女

△評　日で追ひやるの一語にて其人其場の光景が浮む名句といつてはゞからぬ

○日あたりの障子にうつる冬の蠅　美作　一十
○温室へ來ては覗くや冬の蝶　慶山
○手擦みて見等嬉べり冬の蝶　青森　黃雲
○日の當る硯の蓋や冬の蠅　適々庵
○金佛の日あたる闇や冬の蝶　同
○冬の蝶鸚鵡の籠に止りけり　同

△評　其籠は日あたりのよい軒につるしてある。此の構想鷺のものと同巧なるを感む　咲香女

○筆筒でえと道び立てぬ冬の蠅

△評　青村氏のと相撲はすべし

○冬の蠅樽火の上を圓ふ飛ぶ　同
○南縁や人墓ひ來る冬の蝶　同
冬の人の墓ふところ亦冬の蝶の墓ふところ
蝶人に對して意なけれども人羨く之れを見る、此句秀吟とすべし
○天井にランプの蔭や冬の蝶　上總　三生
○病む人の手に力なし冬の蠅　同
○きのふから同じ處や冬の蠅　ナゴヤ　鶴圓
○歸り咲く花に動かじ蝶一つ　不二子
○冬の蝶小蜘蛛の網にかゝり鳧　麗陽
○櫨開きや家中の蠅迷ひ來る　同
○廚の灯兩にもの憂し冬の蠅　懷光
○冬の蜂小屋に蓋打つ女あり　同
○日の恩にせめて明日あれ冬の蝶　カツサ　鐵牛
○日當りや老母追ひ行く冬の蠅　照月女

▲評者の句

○茶の花を搖ぐに驚し蜂力　皷城
○小柱やしめつぶされて冬の蠅　同
○寒闇や黑き小蝶のむくろあり　同

○干大根

序列なし

○尼寺や丈の揃はぬ干大根　夕弧　鳥兎子
○大根干す前を横切る鹿かな　青村
○其夜から鳥は止らず釣大根　秋月
○草の戸の軒に野風や干大根　亞白
○父の喪に服す巡賞大根干す　惟泡
○建增して大根何處に釣んず　同
○積上た俵すれ〳〵やつり大根　直氷
○竹馬に乘る子日向や干大根　照月女
○吊大根内から覗く覺あり　三生
○大根干す百萬遍の日和哉　適々庵
○赤壁の家の豐かや釣大根　鶴圓
○久吉の遺跡の家や釣大根　同

以後雜報は記事幅湊の場合は重立たるものゝ外は揭載洩と相成るべくも計りがたく候間、豫め御斷り申上候也　編輯部

●千葉縣下聯合大法會

概況

既報の如く千葉縣聯合大法會は十月廿七廿八廿九の三日間第三教區如意輪寺に於て執行せり今其の概況を擧ぐれば管長猊下は廿八日の中日御親臨の筈なりしが都合により初日御出席の事となれり當日本多猊下は中村部長の同行にて先づ大網驛に着せらるゝや當地の御書讚仰會佛教婦人會の諸氏は嶄新なる一對の花輪を捧げて一行を歡迎し直に同乘して午前十時十分茂原驛に到るや井上總務渡邊管事山田騎馬の出向を始とし十數流の歡迎旗は高く中空に飜り百餘人の二宮信徒の善男善女は皆花笠を冠りて宛ら胎藏三月百花爛熳たるの觀を呈し就中種々の考案を運らして盛に歡迎の意を表せり斯くて繞從たる歡迎の行列は茂原町を練り式場迄殆ど二里の間題目の聲大鼓の音聲々と秋の淸空を搖り當に誠意を以て款待せる如意輪寺檀家及川三朗氏の宿泊所に近きたる頃には盛に歡迎砲を打揚げ土地老若男女道路に山を築きて拜觀をなし威儀の光輝きつゝ此の宅に入られたり。

午後二時過ぎ法要將に始らんとす內外の雜沓言語を絕す花笠天童音樂二宮信徒等の歡題目手踊多數各教區の參列僧の行列徐々に練りて式場に臨む式砲切りに轟きて廣宣流布の響凄しく萬國旗を縱橫に打張りて國旗を交叉したる大綠門を經て道場に入る堂內の莊嚴盡せることは云ふ迄もなし午後四時嚴肅鄭重なる法要了るや直に管長猊下の御親教となれり兼て期待せる地方機緣は否も〱と詰掛け堂外立錐の地なく中には名刺を事務所に投じて傍聽席を求むる者さへありき夜に入りて各教區布教師等交々長廣舌を奮ひ又老若信徒等の餘興等ありて徹宵をなせり此の日重なる招待者は佐倉聯隊區長郡長警察署長駐在官各在鄕軍人分會長青年會長婦人會長軍人遺族等及寺院檀家總代人等なり。

翌廿八日折惡く雨天なりしも午後一時式始らんとするに雨霽て參拜者堂に滿ち內外の概況前日に變ることなく本日は中村部長導師の下に嚴肅なる法要を修して後は各布教師等の講演となり夜間間く熱誠を續けて大ひに法雨を雨らし地方信徒等の心田を霑せり。

明廿九日は當番三教區の總寺院住職井上總務導師との最後の法要を行ひ塔婆供養の式を終り芽出度二夜三日の大法要を完修せり。

因みに大會中は當地在鄕軍人分會及青年團等日夜援護に力めたるが爲めに何等の過ちもなく又境內に寶物展覽所を設けて有ゆる寺院檀家中より寶物を蒐集して公衆參拜者の展覽に供し總て遺憾なかりしなり。

△三日間の出席講士左の如し

十月二十七日
健全たる信仰　管長猊下
御遺文の一節　成島布教師
戰後の教育と日蓮主義　秋葉布教師
菩薩行　土屋布教師
縣民の氣風と日蓮主義　成東中學教諭石井信一君

十月二十八日
法悦と犧牲の心　木村布教師
唱題の功德(其一)　國分顯有師
日蓮主義家庭倫理　土屋布教師
病想　森川布教師
信仰復活論　竹內布教師
國民皆菩薩主義　鈴木信海師
應受持此經　日暮布教師
吾人の本領　山下純秀師
唱題の功德(其二)　國分顯有師
信仰の力　長岡育應師

十月二十九日
吾日蓮主義　石井信一君
心の實　藤平法順師
忠孝　長岡育應師

○村小町機織る軒やつり大根　咲香女
○大根干す窓に散り込む紅葉哉　不二子
○山住の自慢して煮るや干大根　同
○柿の木の枝に大根干す日哉　慶山
○軒下にポテ張る人や干大根　かね女
○軒釣の大根白し月の照る　黄雲
▼大根引のもの四五ありしも別題に屬する故採らず

○評者の句
○柿干した跡に大根の物々し　鼓城

○十二月題　入營　八手花(やつでのはな)　(〆切月末)
○一月題　福壽草

△はちす會▽　廿六日統一閣內に於て催す

○初冬雜題
互選者　青村。鐵橋。咲香。慶山。歩牛。周女。洽堆

四點
○烏瓜ゆすぶり落す小猿哉　歩牛
二點
○夜釣する舟の灯になく鴫寒し　懷光
○猪待の榾火にしみる霰哉　歩牛
○荒磯の月にむらがる千鳥哉　○
○諦らめて叉手を出すや栗の毬　鐵橋
○釜たぎる爐椽に猫脊寄る夜哉　かね女
○小春日や張もの板の花紅葉　咲香
○小狐の母呼ぶ聲や冬の雨　慶山

○十一月課題『冬雜題』
▼二十七日(舊十月十三日に當る閑齋忌なり)東京小石川白山前町十七番地常檢寺(統一編輯所)に於て開會。午後四時より始む。會費拾錢。辨當御持參。當日は閑齋墓前に於て法事供養を營む。參會隨意。▲地方からは同日前日迄に統一閣內はちす會へ(一人三句以內)

國民道德に就て
法悦
響
先づ現在を救濟せよ
身讀法華
須く醒めよ
屋外布教十數回

秋葉布教師
國分顯有師
倉上瑋榮師
鈴木信海師
河野見中師
竹內顯領師
支學林生徒
青年布教團

施本
廣宣流布　二百五十部
信仰と滿足生活　三百部
詩讚日蓮上人　四百部

●顯本法華宗播備聯合布教會

規約

一、名稱　顯本法華播備聯合布教會と稱す
一、目的　神戸、明石、志方、姫路、和氣、岡山の六教團聯合提携布教を目的とし併せて教團相互の親睦を計る
一、方法　(イ)　布教の時期、毎年春秋二期とし日時は其都度協定す
(ロ)　教團の區劃、神戸明石を第一區、志方姫路を第二區、和氣岡山を第三區とす
(ハ)　期間と區域、一期間布教日數を二日間とし區域を一區づゝに限る
(ニ)　布教の費用、旅費は出席講師の各自負擔とし接待講演會等の費用は當番教團の負擔とす但し謝儀を全廢し質素を旨とす
一、會員　教團各地の布教師を正員會とし信徒を贊助とす
一、會費　一切會費を要せず、但し報告通信等少額の費用は當番幹事の負擔とす
一、役員　一ヶ年半の任期を以て正會員より輪番に幹事一名を置き直接布教事務に關する外の一切の會務を掌理せしむ、幹事駐在の所に事務所を設く

●播備聯合布教大會

顯本法華宗播備布教家聯合にて神戸以西岡山以東鐵道沿路樞要の地に於て春秋二回聯合大會を開くの約なりて其第一回を十月廿六日午後七時より備前和氣本成寺に開催せり。

開會の辭　原田日勇
弟子一佛の子として　吉永日洋
行け救濟の道　川崎英照
闘浮一聖　高田日暢
國家の將來と將來の宗教　中川日史
昔の信者と今の信者　能仁事一

集まる者三百餘にして法益甚大なり、一行は翌廿七日午前岡山に向け出發、同夜木行寺に開催四百の來聽者ありて各自其所信を語り十時半散會せり。

開會の辭　能仁事一
國民教育に及ぼす宗教の力　川崎英照
人類の生活と佛陀の宗教　吉永日洋
宗教意識に就て　中川日史
聖祖三度の高名　高田日暢
瓔珞莊嚴の身を現せよ　原田日勇

●明石教報

●日蓮主義研究會　毎月三日十三日廿三日の三回夜間明石驛前通橘香會々場にて開催し各自眞面目なる研究を持續しつゝあり。
△△△撰時抄講義　川崎英照師
●橘香會例會　四日夜同所に開催
△△△佛教婦人觀　同師
●店員講話　毎月十日夜明石本町白井吳服店樓上に於て日蓮主義修養講話あり
△△△日蓮主義に就て　同師
通俗法華經講話、十五日夜松井堂に於て開催せり
△△△藥草喩品大意　同師
●鍼灸術者大會講話　廿三日午前十時より明石公會堂に於て秋期大會あり、小野寺醫師宮崎警察署長の訓話あり。
△△△協同一致の力　同師
●兒童會　毎日曜日午前九時より橘香會場にて開催修法の後小笠原寂天川崎英照師等の講話あり

●佐藤海軍中將講演

橘香會秋季大會を十月廿五日午後二時より郡公會堂に開催し折柄佐世保に於ける海軍演習に出張せらるゝ佐藤海軍中將を特請して左の講演を聞けり。

開會の辭　幹事
我國現代と宗教　三輪前明石郡長
國體の精華と日蓮主義　佐藤海軍中將閣下

佐藤閣下は其夜直ちに佐世保に向け出發せられたり。

●神戸教報

●神戸護正會　十月五日午後七時より北長狹通り

○二個の感

長月下の五日野口何處子と宗命により大刀根を渡り茨木太田新田に遊教す

秋雨を刀根の汽船に暮るゝ客　蹄
下總の山は時雨れぬ刀根の秋　同
秋刀根を魚一ツ飛ぶはしけ哉　同
雨の宿問題進まず刀根の秋　何處子

十月三十日夜來の暴風雨大海嘯を卷起し東京灣の沿岸人家の流失人畜の死傷其の幾千萬なるを知らず

海嘯襲ふ濱野の里や軒五寸　蹄
つ潰して稲田に家の流れけり　同
鹽水に垂穗の稲やつ涙跡　同
日毎干す鹽の疊や秋の暮　同
鹽に浸む布團も着たり秋の夕　同
刈る稲も家も流れて夕日富士　同

一丁目道德義會に於て其例會を催したり。

人生と宗教　寺門幾太郎
我國現代の宗教　清水一乘
佛教婦人觀　川崎英照

●本多大僧正の講演　十月十七日午後七時より同所に於て神戸護正會、天晴會聯合大會を開催し雨中三百の來聽者ありて左の講師御出演せられたり。

開會の辭　寺門幾太郎
法華經に就て　小笠原寂天
未定　何木政之助
所感　草鹿法學士
現代の信仰狀態に就て　金光布教師
思想の高輝　本多大僧正猊下

●同心會講演　神戸日蓮門下の僧俗に依て組織されし同會にては本多大僧正の來神を好期として十八日午後七時より三宮カフエーオリエントに於て開催したり。

反者　平井學俊
所感　河本政之助
日蓮主義の正信正解　本多大僧正猊下

五百の聽衆大歡喜を得たり、本多猊下は神戸教界發展上に就て神戸信徒と會合せられ不日其計畫は天下に發表せらるべし。

●神奈川縣　横濱市内に日宗寺院十四ケ寺を有するも其布教方面に關しては甚だ振はざるの狀態にあり僅かに法華會國柱會村雲婦人會及び政教公論社布教部の運動あるのみ三上政教公論社長は單獨布教を企て漸次擴張の氣運に向ひつゝありと云ふ九月五日は横濱市神奈川原田醫院に家庭講話を開き眞面目なる求道者相集りて發心せしむるものありしと同月九日は市内長者町長壽軒に公開演說を催し三上師の三時間に亘る獨演あり同十六日は市内北方妙香寺に村雲婦人支部例會ありて松森師等と共に三上師は廣長舌を振はれ二十四日市外鎌倉郡役所の招聘により村岡村青年團總會に於て三上師は戰時國民の用意に就て警告する所あり隨處日蓮主義の氣風を鼓吹しつゝありと云ふ。

●大阪堂閣寺教報　十月十一日午後二時より聖典講究會一週年記念法要を修し午後七時より大講演會田中橋本に次で異體同心師川眞玄、災害退治と法華經京藤義應、然興其藥而不肯服上田布教師。十月二十一日夜國體と日蓮上人師川眞玄日蓮上人と拳道京藤義應

十月二十二日三軒家西崎宅にて日蓮上人の偉仰師川眞玄日蓮上人の慈愛京藤義應本門の本尊信隆日秀何れも盛會を極め多大の功果を發せり。

●美作通信　美作津山に於ける十月中の教報左の如し。○二日、七日、十二日、十七日、二十二日、何れも午後七時より弘通所に於て能仁一十師の法話ありたり

●龍ノ口御難會　十月二十七日は恰も舊曆九月十二日に相當せるを以て上之町法蓮寺にて龍ノ口御難會を終夜嚴修なし能仁一十師は日蓮上人の高恩と題して說教あり來集者多大

●千葉縣（瑞穗）　九月二十一日山武郡瑞穗村駒込東榮寺にて彼岸會修法開催講演　日蓮上人三種の孝養

十月廿二日山武郡瑞穗村潮風會免囚者懺悔式を瑞穗村平澤本榮寺にて施行

會長（齋藤村長）　駐在所警官　理事　廣部乾山　區長
副區長　親戚出席　佳職狹席　齋藤會長　將來の懺悔に就て　廣部乾山　遷善の路
方針　駐在巡査　區長の訓話あり。午後五時閉會。十月三十日山武郡瑞穗村駒込東榮寺にて連月例會開催講演

懺悔的發心　廣部乾山

●豐成通信　千葉縣山武郡豐成村妙善寺に於ては十月三十日顯本教會の例に例り、法要勤修後小竹俊雄師は顯本の意義の題下に佛意開顯の本義を說く。廿一日朝より天長節には聖壽無彊奉祝法要を修して國恩に報ず。

●松崎本立寺の御難會　舊九月十二日午後七時法要修行八時より社會教育幻燈畫二三十枚は寫され新住朝倉俊遍師は順次說明了りて宗祖日蓮上人傳記に入り龍口御難を熱辯を振はれ多大の感動を與へたり此日土曜日なるため來會者無量貳百名兩陛下奉寫の時は本郷學校先生指揮の下に男女學生の君が代三唱ありし近來になき盛況なりき。

●松本堅晴師の晋山式　豫て豐橋妙圓寺に赴任せられたる松本師は十月二十日盛大なる晋山式を擧行せられたるが當日教區としては岡本、西山、高橋、山本等の各師其他檀信徒の參列者三百餘名にて、松本師の式辭山本通辨師の講演ありて午後四時卒出度結了せりと、尙松本師は今後漸次教界方面に活動せらるべしと。

●自修庵秋季花會　投入花盛花自修庵齋藤瑞詮氏は去る十三日人形通町相互倶樂部に於て秋季大會を催されたり。

●東京感化院秋季紀念大會　十月二十八日擧行、來會者大數にて盛會なりき。

●上村大將追悼詩歌進奠式　十一月七日午後二時淺野常瑞師主催の同式は鹿兒島日蓮宗開教本部に於て催さる、法會導師淺野師、詩秋邁奠大久保中將、幾香、講演大迫大將、玉利博士の順序なりしと。

●久城古野子刀自逝去　顯本法華の强信者として斯界の模範と立てられたる岡山市故久城茂太郎氏の悲母たる古野子刀自は溫良にして、美貞悠容人に交り、德の婦人として知られ、岡山顯本婦人會長として斯道の爲にも盡されつゝありたるが、近來鬼角痼疾の爲に健康勝れず、去る二十八日午前三時半骨肉親族の人達の唱題裡に自らも題目しつゝ睡するが如く逝去されたりと、刀自の肉弟に熱心家宇垣卯三郎氏あり、其他久城清吉氏等一門悉く宗義崇信の熱心家なり、當主は茂太郎氏の息信一郎氏にして多吉氏は第三子、大熊虎太郎氏は其女婿なり。記者曾て岡山にありて刀自の厚情に接すること多く溫顏今尙目前に彷彿す而も今遽かに其の逝去を聞く悼惜に堪へず、靜に題目を唱へて遙かに岡山の地に對つて合掌す、南無妙法蓮華經。因に享年六十一、戒名は久遠院妙顯日持信女、本葬十一月十日午後二時に終りたりと（松尾生）

（弔）　柿の葉の日に照りて散る小春哉　山陰道の富豪にして

●市橋龜藏氏夫人葬儀　本宗教學財團理事長たる市橋龜藏氏夫人春子は貴性溫良好く夫を補け一概法華の稱ある信仰の中心となりて家政を掌り賢夫人なりしも十月六日午後四時頃突如として發病七日午前三時半醫藥其効なく五十三歲を一期として、逝去せらる菩提所本立寺は住職交替の際として前後住職は俱に臨終正念を祈り十一日發式當日は京都本山より萩原部長管長代理として來り大導師となり法號を顯事院殿妙春日成大姉と授與され朝倉俊遍師窪田純榮師は副導師とし鳥取縣法泉寺桔梗開章師、萩妙蓮寺紀野俊雄師外倉吉、鳥取日宗寺院六ケ寺は會葬され山陰地方の有力者の來會するもの多數にて頗る盛大なる儀式にして十二日茶毘式十三日寺塋り十五日堀葬式なりき。

●同別報　財團理事長市橋龜藏氏令室の葬儀かくも憂し、かゝねば須磨の、浦さびしき、秋の末つがたとこしへに、忘れられぬ十月六日、吾宗の大檀那、市橋龜藏氏の令室、お春の君は、俄然病魔に襲はれ、翌七日の朝まだき、悲しき明鴉の聲と共に、靈山往詣の首途をなし玉ひぬ、單なる藝語とのみ思ひし生別死別の語を今まのあたりに實感し、活る教訓を受たるは、永久に余の忘れ難き事となりぬ、それは余が第一教區長照寺に、轉任を命ぜられたるを以て、それが袂別の禮をなすべく、又後任朝倉俊遍師は、新任披露の爲に參館し、主人令息の君に對面して後、令室お春の方は挨拶に出られ、少時物語をなし居られしも、親戚の來客ありしを以て。其座數へ行かれ、四方山の話の中に、俄然發病せられ、遂に歸らぬ人となられたり、此の如く最後に會見して、言葉をかはせし人、特に十五年の長き間、常に參經の時は、家從其他の人あるにかゝはらず、自から余が爲に衷心より、歡待を與へられたるは忘れんとして忘るゝ能はざる、清信女にして、風につけ、雨につけ思出の種となりぬ、嘸實に悲みの極みなり、十月十一日は此の大信女の爲に葬送の盛儀を行はれぬ、管長、代理本山部長萩原僧正、唱導の首となられ、副導師には朝倉俊遍師と余之を勤め、十五名の大衆を以て、嚴かに葬儀は開かれ、懇慇なる儀式は、滯りなく、終りたり名にしをふ山陰道の長者なれば、親戚を始として、各方面よりの會葬者は、無數にして其壯觀喩ふるに物なし、終りに余の拜誦したる祭文を以て、筆を捉することゝせん。

祭文壹章

伏して惟みるに蒼天の弦月は白雲に隱れて生死の二法を示し瀟邊の秋風は颯々として哀愁の悲韻を奏す觀しなれば四圍の環境悉く之れ無常遷滅の塵土ならざるはなし而して生を此の境域に受く何物か起伏生滅の天則を免かるゝものあらんや依之佛陀と跋提に涅槃の儀式を齊へ上聖は法林に示寂の法粧を遺し玉ふ先聖已に然り況や濁末の凡夫に於てをや、拄に今葬送する處の靈魂は俄然二聖の爲に犯され遂に五十有三歲を人界の一期として泊然として常寂光の妙土に去り玉ふ嗚呼悲ひ哉。

案するに靈位は天資溫順にして淑德を修め今は家事を整束して能く內助の實を擧げ出ては虛飾を厭斥して能く眞情を傾け物を好惡を擇ばず人には鏗愛を抱かず所謂衆を容るゝの海量あるを以て里人は其愛を慕し鄕黨は其德を賞揚す玉の自から溫潤含蓄の氣象あり一句は以て靈位の全分を形容せるものと謂ふも差し不可なからんか歟。

特に感ずべきは靈位純善の信行は日夜朝暮を問はず終始一貫して渝らざるは又以て信徒の模範とするに足るを想ふ然るに今や幽顯境を異にし親りに溫容に接し再び唱題の妙音を聞く能はざるに至る嗚呼實に悲ひ哉。

沙門日靖永く本立寺に住し豐かに法務を觀るを得たるは恒に靈位が愈志の賜なるを感じ思ひを靈位の逝去に運べば哀慟胸に充ち文藻爲に亂れ筆遠に遡まず依之大聖日蓮の御書を拜誦し靈位を寂光の寶刹に送り奉る。

日蓮が弟子檀那等の中に日蓮より後に來り給ひ候はゞ梵天帝釋四大天王聞覺法皇の御前にても日本第一の法華經の行者日蓮房が弟子檀那なりと名乘て通り給ふべし此の法華經は三途の河にては船となり死出の山にては大白牛車となり冥途にては燈となり靈山へ參る橋なり靈山へまゝして長の廊にて尋ねさせ給へ必らず待奉るべく候、南無妙法蓮華經

維時大正六年十月十一日

茨城縣長照寺第十七世
本化沙門　奮迅院日靖

（窪田孤松手投）

稽首和南

●窪田純榮師の轉任　前本立寺住職檀信都窪田純榮上人には今度宗務廳の命令により茨城縣鹿島郡長照寺に榮轉せらるゝことゝなり十月十六日出發せらる。

回顧せば上人入山以來實に十有五年一日の如く檀徒を教化し鄕黨を調育せられたれば村內自他宗の區別なく上人の高潔なる人格を敬慕し一たび榮轉の報傳るや關邑惜別の聲に充ち檀徒亦留任の運動を開始せんと鳩首協議せるも宗命低發の後にて如何ともする能はず止むを得ず運動を中止し九月二十三日を以て檀徒及有志縣合にて祖道の宴を張る會する者約八十名青年會長渡邊春治氏開會の辭に次ぎ諸氏の送辭あり窪田上人の謝辭にて酒宴に移り主客十二分の歡を盡して散會せり松崎檀下側にては連署して感謝狀及銀壺壹個を紀念品として贈呈し以て謝恩の微衷を表す。

十月十六日には朝倉上人市橋一門の諸氏を始め檀下一同役場員學校長郵便局長其の他村民全部見送り上人の萬歲を高唱して十時四十一分發列車にて東上せられ市橋昌晴氏市橋彥藏氏市橋常藏氏は鳥取驛まで見送りせられたり。（松崎檀家報）

送淮田尊師榮轉　樸堂　樵夫

照量山上瀾風鮮　鶴洲東畔秋光妍
幾回春秋如斯徂　止錫說道十五年
鄉黨慕德乞教鞭　老幼馴恩集寺鐘
濟世一念周邑蹕　氣氳和風法衣纏
料知今日距雲煙　忽覺今宵夢不全
吟燈一穗添寂寞　遙想師恩仰半弦

玄妙會郊外會

十二日玄妙會を郊外に催す、午前九時京成電車に投じて市川に着く、眞間弘法寺に詣づ豫て山田師の周旋ありて住職酒井日慎師の厚意に依り寶物の拜觀並に茶菓の饗應を享く、寶物中にても什祖の歸伏狀は我々の心を最もそゝるものであつた、其文は（天台より）蓮祖の正義を慕ひ富士に歸伏したるも其義に滿足せず更に來つて眞間の教園に歸伏するの一條である、什祖が天台の義に物足らずして一大疑義に彷徨のところ、一日開目鈔如說修行鈔の二卷を拜し、飜然として本化の妙宗に歸伏す時に六十餘の老年なり自ら日什と改名して富士に至り眞間に遊ぶも當時蓮祖上人の教義を誤り傳へて正しからず、什師乃ち直ちに仰いで蓮祖に歸し奉り經卷相承の統流を樹立せられたのである、是れ什門流であつた。日什師の置文には眞間の歸伏狀の事を記し眞間を去るの意を註して捨惡知識のすがたなりとあるは是である、當年什祖此山に在て御苦心されたるを思ふて一行等しく涙を垂れたのである。昔時は什門に向つて此歸伏狀は開放せざりしも、現今、漸く意志の疏通を得望みに任せて開放し縱覽を免さるゝは一行の滿足するところであつた次に酒井師の紹介にて木內氏の別邸庭園を一覽した。それより鴻臺（國府）に遊ぶ、此處は下總國府のありしところ前に市川（小利根川）を控へて眺望に富みたる要害の地である、されば昔時關東諸侯の爭點となり、天文七年北條氏綱、氏康父子と小弓義明、里見義弘との戰があり、里見氏敗れ、義明は討死したのである、永錄七年里見義弘再び北條氏康と此地に戰ひ義弘は敗走したのである、此故に後世志あるものあつて里見氏の戰死者を追悼した墓など立つて居る、此にて舊本丸の林間に一行の首腦野口日主僧正は立つて一場の感想的談話があつた、其要は『正しき意義ある行動は是皆法華經の行動である、玄妙會の今回の郊外遊、特に什師の足跡を訊ねて其芳蹟に感興を催すは少からぬ意義を有つて居る、本日小春日和の好天氣神心を養ふて他日の教料となす、正に僧伽並に信家の良好遊、即ち橫に（地の）法華經的修業の最優なるものであらう』云々、此に玄妙會の萬歲、一行の萬歲を唱へて林間より出て、川に向へる一亭に憩ひて愉快に中食を採り便船に乘じて川甚の下に着き、其れより柴又の天釋に至り電車に乘じて押上に着き、此に解散をしたのであつた。時に太陽は富士山の背後に落ちて美觀云ふべからざるものがあつた。

本會は玄妙會始めての精神的愉快なる會合であつた、つまり幹事熊井本光、木村義明の二師が豫て實測され、用意萬端遺漏なきに依つたからであつた、其の勞を深く二師に謝してをく、一行姓名左の如し。

野口日主　鈴木日雄　笠原琢瑞
大須賀玄遊　松田宏榮　石渡英徹
安藤日莊　熊井本光　木村義明
長谷川よね子　高須わく子　松尾鼓城

大十賜
正月
六天
八日
年
覽

上村大將追悼集

菊版二百頁、寫眞版十七葉、四號活字、最も莊嚴の製本、

○本書は現代名士が故大將の偉勳と人格とは活ける日蓮主義なるを說て遺憾なし後進の修養に最も好模範たり宗門書院勿論識者の御一讀を切に望む

●九月中發行●

故上村大將肖像
同自筆の詩（奉旨撰上二首）
同御題目（小笠原子爵所藏）
日桑殿下題字
侯爵村雲宮松方正義閣下題字
伯爵東郷平八郎閣下訪詩
伯爵樺山資紀閣下詩
子爵大井上良馨閣下題字
子爵黑田清綱閣下歌
男爵日柴宗城閣下題字
小山長茂閣下詩
小牧昌業先生序文
三位大久保利通閣下序文
陸中將早崎源吾閣下序文
海軍少將吾妻常瑞閣下序文
海軍軍主計長浅野常瑞編纂
海軍中將東郷平八郎閣下
海軍中將東郷平八郎閣下
海軍中將東郷平八郎閣下
海軍中將佐藤鐵太郎閣下
海軍中將佐藤鐵太郎閣下
農學博士玉利喜造先生
文學士高等師範學校教授花田仲之助先生
文學士高等師範學校教授山田準先生
同　谷山初七郎先生
同　江口國彥先生
●附錄　大將官歷、自作詩歌葬儀と教德弔詞、病床日記發去まで

●言行錄　八十三首
●言行錄　墨田、高辻閣下はじめ金玉の什三百五首
●追悼歌　非賣品なれど殘本あり實費にて分つ
●追悼詩　樺山、柴山閣下筆頭に佳句壹百四十四篇
●追悼詩　天覽記念本　金壹圓五拾錢　並　金壹圓也　製
●金部以上御求は追悼會より一部宛進呈す

右取次所
東京市小石川白山前町統一編輯所
口座東京三三五三三

日宗法衣專門

青雲帽　帝釋服　袴

定價表ハ御申越次第
何時ニテモ御選申上候

飯田法衣店

京都市佛具屋町五條北
振替口座大阪六八四七

佛像佛具一切卸小賣

各本山御用達

定價表郵稅四錢
小賣部　京都三條小橋東入南側
長距離電話中貳七八參番
振替口座東京貳〇七壹
大阪四貳五九

卸部　京都市三條通小橋西入
本舗　三法堂　藤田總治

●位牌木魚卸小賣
●御來店之節ハ陳列場ヘ御來車被下度是迄ト
一層勉强仕り
●佛具一切陳列仕置候●

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正六年十二月十五日發行（毎月一回十五日發行）

賜天覽

世界的
經典の
根本的
闡明

大藏經要義

文學博士 井上哲次郎先生叙
文學博士 姉崎正治先生（附錄）論文
海軍中將 佐藤鐵太郎先生序
大僧正 本多日生師撰述（全拾八卷）

隔月一冊刊行

菊判洋裝三方金函入
毎卷約四百頁
正價各壹圓八拾錢
內地送料各十二錢

■第一卷より第四卷迄刊行 ■第五卷十一月出版

本書は大藏經中重要なる經典約一千餘卷を撰出して其の組織と綱要とを簡明平易に講述し、且つ要文を訓譯して詳解を附し、醇乎たる宗教的の妙旨、周到なる道德的の教義深遠なる哲學的の真理、微妙なる人生訓を開明し來つて一般人をして浩瀚なる一切經の要義を公正に會得せしめんとする空前の大著也大藏經は佛教各宗の源流にして復是れ東洋文明の最高權威たるは論なき所今刻苦に進むに當り歴史的思想の傳統を諦觀するの必要迫れるの時この大著に接する國人は擧つて本書の出現を歡迎すべき也。

本多日生大僧正師著

三版 ■法華經講義（全二冊）各壹圓八拾錢 小包料各十二錢
四版 ■日蓮主義（全二冊）九拾五錢 郵稅六錢
再版 ■修養と日蓮主義（全一冊）九拾五錢 郵稅六錢

▲本誌事務取扱所東京市小石川區白山前町統一編輯所
發行所東京市淺草區北清島町十四番地編輯兼發行人松尾英四郎▲印刷人鈴木日雄（▲本誌定價一冊十錢郵稅五厘▼）

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正六年十一月十五日發行（毎月一回十五日發行）
統一事務取扱 東京市小石川區白山前町 統一編輯所

發行所
東京市日本橋區本町
博文館
振替貯金口座東京二四〇番

（東京市神田區美土代町二丁目一番地 三秀舍印行）

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正六年十二月十五日發行（毎月一回十五日發行）

第廿一年 統一 十二月號

統一

（第二百七十四號）

日蓮聖人教義綱要 …… 井村日咸

聞法と思惟 …… 法學博士 山田三郎

大藏經要義獻納言上文 …… 大僧正 本多日生

日蓮上人論 …… 栄花野人

宗教を根柢にしたる教育と人心の指導 …… 男爵 九鬼隆一

機微譚 語（其四五、一念發起 其四六、糠糟三百）…… 山根青村

和歌「歳暮祝」發表 …… 子爵 清岡長言選

俳句「統一俳壇」はちす會等 …… 各地教報

發行事務取扱所 東京小石川白山前町 統一編輯所
振替口座東京三三五三三番